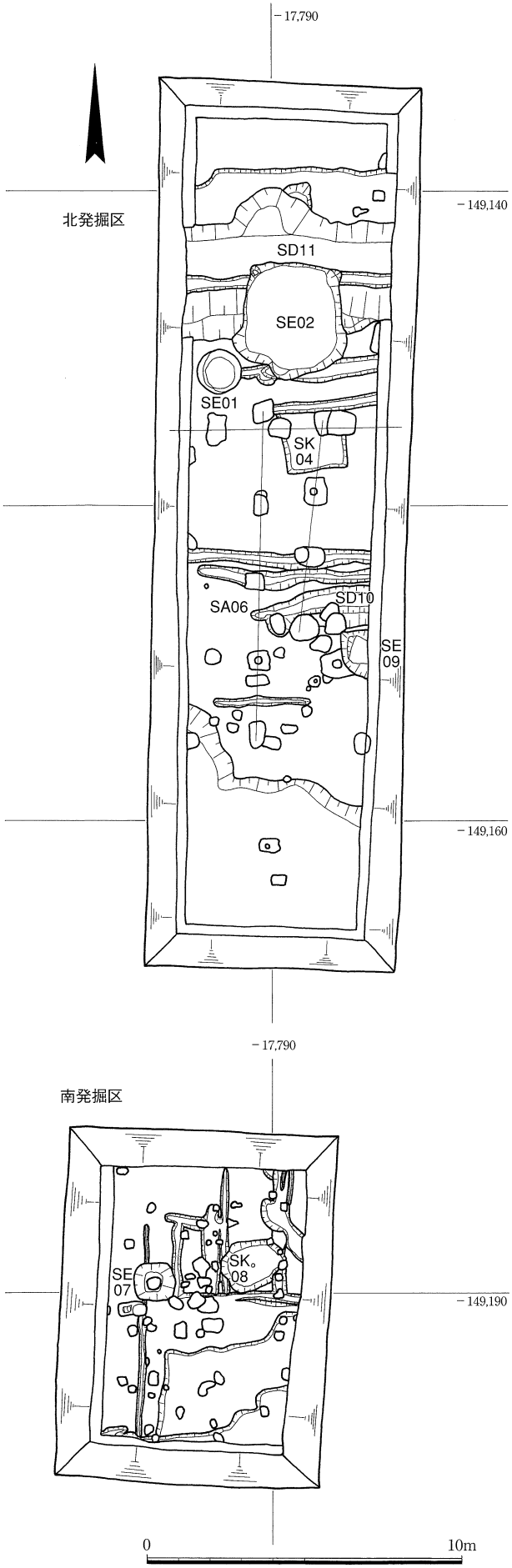
南発掘区の基本層序（北壁）は、①造成土（約0.7m）、②黒灰色粘質土（0.1～0.3m）、③暗灰色土（約0.1m）と続き、その下層に㉕暗茶褐色土〔灰色かかる〕（約0.2m）または㉖暗茶褐色土（0.1～0.2m）、㉗暗茶褐色土〔暗い〕（0.1～0.2m）があり、⑯灰褐色粘土の地山層に至る。南壁では後世の流路の影響で様相は少し異なる。

遺構面は基本的には地山上面であるが、南発掘区では主に鎌倉時代の遺構を検出した。遺構面（地山面）の標高は、南発掘区北東隅で52.9m、南西角で52.6mである。

Ⅲ　検出遺構

本調査では奈良～平安時代前半の井戸１基、柱列３条、鎌倉時代の井戸２基、溝１条、土坑１基、室町時代の溝１条、時期不明の井戸１基、土坑１基等を検出した。

ＳＥ01は、北発掘区中央やや北西寄りの場所で検出した井戸。掘形は、平面ほぼ円形で、径は約1.4m。枠組は二段構造になっていて、上段は一木の丸太をくりぬいたもので、径約1.0m、残存する高さは約2.5m。厚さは最大８㎝。下段は、高さ約0.55mの曲物で、径は約0.7m、厚さは約１㎝。たがは３条ある。下段枠外の西・東側から杭を打ち込んで固定している。井戸枠上段の基部には丸瓦や平瓦を敷いていた。枠内からは９世紀前半の土器と伴に加工したココヤシ内果皮が出土した。ＳＥ02は、北発掘区中央北寄りで検出した井戸。枠材は抜き取られ残存していなかったが、板材（0.9m×0.45m）のみ１枚出土。掘形は、平面隅丸方形を呈し、東西径は約3.0m、南北径は約3.5m、検出面からの深さは約3.6mである。遺物はほとんどなく、時期は不明である。遺構の重複関係から後述のＳＤ11よりは古い。ＳＫ03は、発掘区中央やや北寄りで検出した土坑。平面長方形を呈し、規模は東西約2.3m、南北約2.0m、検出面からの深さは約0.15m。遺物はほとんどなく、詳細な時期は不明。後述のＳＡ04、05よりも新しい。ＳＡ04は、北発掘区中央で検出した南北方向の柱列。３間分（6.75m）を検出した。ＳＡ05は、北発掘区で検出した東西方向の柱列。２間分（4.2m）を検出し、東・西とも発掘区外へ続く。ＳＡ06は、北発掘区で検出した南北方向の柱列。４間分（9.6m）を検出。北・南へと続く可能性がある。あるいは、建物となる可能性も考えられる。ＳＥ07は、南発掘区中央やや西よりで検出した井戸。掘形は平面楕円形を呈し、東西径約1.5m、南北径約1.3m、検出面からの深さは約1.6mを測る。井戸枠は曲物を三段に重ねた構造で、掘形底面には径５㎝前後の川原石を敷いている。上段の曲物の径は約0.45m、高さ0.25m、中段の曲物の径は約0.4m、高さ0.3m、下段の曲物の径は約0.4m、高さ0.3mで、中段と下段部分の曲物は２～３㎝程度分が重複するような形で



発掘区遺構平面図　１／200

第484次調査　北発掘区全景（南から）

第484次調査　北発掘区中央付近（東から）

第484次調査　南発掘区全景（北から）

第484次調査　北発掘区全景（北から）

井戸ＳＥ01　断割状態（東から）

井戸ＳＥ07　断割状態（北から）

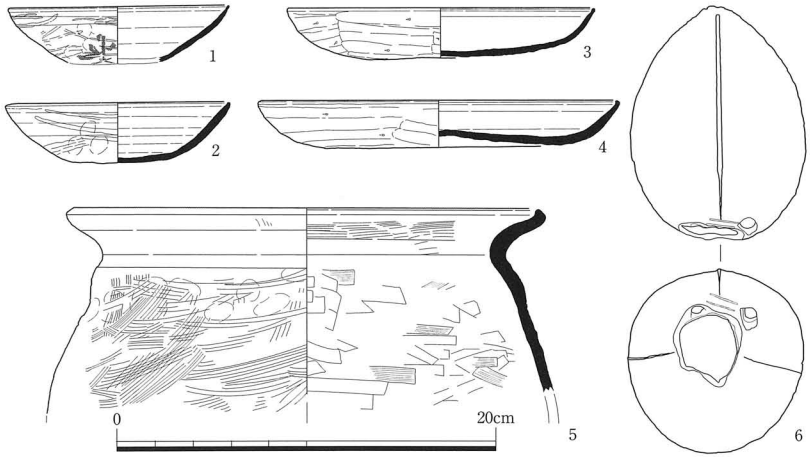
積み重ねていた。埋土からは、11世紀中～後半頃の黒色土器Ｂ類、瓦器、白磁、須恵器とともに鹿の角が出土した。ＳＫ08は、南発掘区で検出した土坑。平面鶏卵形を呈し、東西約2.0m、南北約1.7m、深さ約0.2m。埋土から11世紀後半～末頃の黒色土器Ｂ類や瓦器が出土。ＳＥ09は、北発掘区東辺中央やや南寄りで検出した井戸。東半は、発掘区外へと続く。井戸枠は確認できなかった。様相から推測する限りでは、素掘りの井戸と思われる。掘形の南北径は約1.4m、検出面からの深さは約0.7m。埋土から13世紀前半の瓦器が出土した。ＳＤ10は、北発掘区の中央やや南寄りで検出した溝。検出した長さは約3.7mで、東側は発掘区外へと続く。深さ最大約0.3m。埋土から13世紀中頃の瓦器が出土。ＳＤ11は、北発掘区の北側で検出した東西方向の溝。検出面での幅員は5.5～5.3m、底部の幅員は約1.5m、検出面からの深さは約1.0mを測る。埋土に含まれる遺物は多くないが、16世紀後半の瓦質土器が出土した。

この他、南発掘区で小穴を多く検出した。いずれも平面円形か楕円形で、径は0.2～0.5m。底部に石を置く例が目立つ。多くは埋土に瓦器を含む。状況から鎌倉時代頃の建物の柱穴と推察されるが、明確にまとまらない。

Ⅳ　出土遺物

遺物は遺物整理箱約37箱分が出土した。ここでは井戸ＳＥ01の枠内から出土した遺物について概要を記すが、遺物の総量は僅かに遺物整理箱約半箱分に留まる。

1・2は土師器椀Ａ。1は口径11.6cm、器高3.0cmで、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部下部には墨書が1箇所認められるが、判読不可。2は口径11.8cm、器高3.2cmで、内外面ともにヨコナデ調整のち体部外面と底部はミガキを行う。3・4は土師器皿Ａ。3は口径約16.2cm、器高2.7cmで、内面はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整を行う。4は口径19.0cm、器高2.5cmで、内面はヨコ



井戸ＳＥ01出土遺物　1/4

ココヤシ内果皮

ナデ調整、外面はヘラケズリ調整を行う。５は土師器甕で、口径25.1cm。体部内面にハケ目痕跡が残る。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整を行う。これらの土器は、形態や調整技法からみて９世紀前半頃のものと考えられる。６は加工したココヤシ内果皮。長径12.3cm、短径9.8cmで、頂部の出芽孔を拡張する方法で径約３cmの孔を穿っている。孔周辺以外には加工痕跡は見られず、顕著な使用痕跡も認められない。本来ココヤシは熱帯性植物で、現在の気候環境下では日本付近では産せず、フィリピン等の赤道直下の南方から海流により果実がもたらされることは屡々ある。遺跡からの出土例は現在のところ日本本土周辺で20例程度あり、笛に加工した例もある。どれも臨海の遺跡より出土し、内陸の遺跡から出土の報告は現時点では知られていない。なお、本例と酷似した物に正倉院宝物の例がある。南倉に伝世する製品で、鎌倉時代以前の品と考えられている。出芽孔を利用して穿孔している点で本例と共通するが、更にココヤシ特有の二つの退化胚芽孔痕跡を目に見立て、穿孔部分が口となるような装飾・着色を施されている。この点、本例には装飾・着色痕が認められず、また穿孔・整形の手法も比較的稚拙であり、人面を意匠し穿孔したかは疑わしい。また正倉院宝物の例は、内果皮のプロポーションが丸型を呈し、現在世界に広く分布する栽培種と同じであるが、本例は尖底型を呈し現在では殆ど自生していない先祖型品種に類別される。日本古代遺跡より見つかるココヤシの大半が先祖種である点は、ココヤシ品種の時代的変遷を裏付ける様相となっている[註)]。双方とも日本の海浜に漂着したココヤシ果実を加工した物か、対外的交易活動を通じてもたらされた果実を加工した物か、当初から加工された工芸品として舶載されて到った物なのか定かでないが、いずれにせよこのような南方の産物が内陸の都城遺跡で出土したことは、当時の交易物流の実態を考察する上で重要であり、かつ正倉院宝物との関連性の点でも興味深い発見である。　（武田和哉）

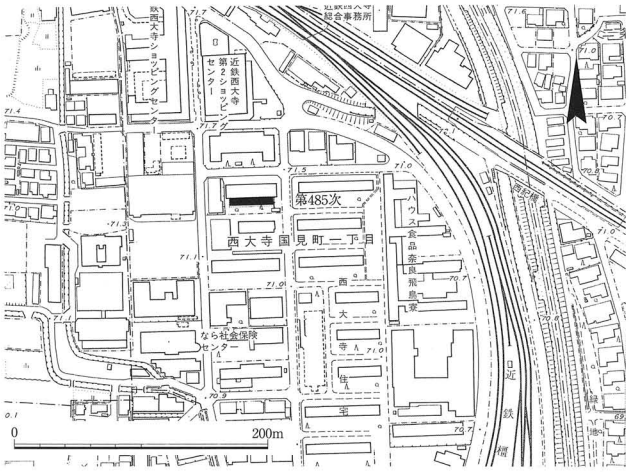
註）　杉村順夫・武田和哉「平城京遺跡から出土したココヤシ種子遺物の形態解析」『熱帯農業』ＶＯＬ．48別号１　2004

全国ココヤシ出土事例集成表

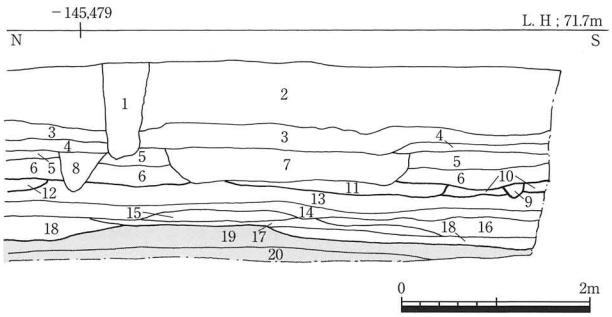
	所在地	遺跡名	遺構年代	加工の有無	判定	典拠
1	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	漆付着	先祖種	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
2	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	小片	不明	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
3	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	小片	不明	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
4	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	小片	不明	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
5	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	小片	不明	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
6	千葉県銚子市	粟島台遺跡	縄文時代	小片	不明	銚子市教育委員会『粟島台遺跡』
7	石川県金沢市	中屋サワ遺跡	縄文時代晩期		先祖種	現在整理中
8	石川県金沢市	中屋サワ遺跡	縄文時代晩期	穿孔（約１cm）・加工痕跡あり	栽培種	現在整理中
9	福井県三方町	鳥浜貝塚	縄文時代	発芽孔のある頂部を含む	不明	福井県教育委員会『鳥浜貝塚』、福井県『福井県史通史編１』、国立歴史民俗博物館・辻誠一郎氏のご教示による
10	福井県三方町	鳥浜貝塚	縄文時代	発芽孔のある頂部を含む	先祖種？	同上
11	福井県三方町	鳥浜貝塚	縄文時代	発芽孔は上記２点より小さい	不明	同上
12	福井県三方町	鳥浜貝塚	縄文時代	不明	不明	同上
13	兵庫県神戸市	玉津田中遺跡	弥生時代中期	穿孔（長径約4.8 cm）	先祖種	兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡』
14	島根県松江市	西川津遺跡	古墳時代前期	穿孔（口径６cm）	先祖種？	島根県教育委員会『朝酌川河川改修に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
15	福岡県福岡市	比恵遺跡	弥生中期～古墳	穿孔（口径７cm）	先祖種	未報告・展示
16	長崎県芦辺町	原の辻遺跡	弥生時代	小穴を穿孔	先祖種	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所『原の辻ニュースレター』第６号
17	長崎県芦辺町	原の辻遺跡	弥生時代	小穴を穿孔	先祖種	長崎県教育委員会『原の辻遺跡』〔原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集〕
18	長崎県鷹島町	鷹島海底遺跡	鎌倉時代（元寇）	加工痕跡あり	栽培種	未報告（『鷹島海底遺跡Ⅷ』）
19	奈良県奈良市	平城京遺跡	平安時代初期	穿孔（口径３cm）	先祖種	今回出土品
20	奈良県奈良市	正倉院（伝世品）	奈良～平安末？	穿孔（口径約３cm）	栽培種	奈良国立博物館『平成三年正倉院展』、松嶋順正『正倉院よもやま話』1989

10. 平城京一条二坊・一条南大路の調査　第485次

調査次数	ＨＪ第485次	調査期間	平成14年11月11日～12月10日
工事内容	マンション建設	調査面積	245㎡
届出者名	新星和不動産株式会社	調査担当者	山前智敬
調 査 地	奈良市西大寺国見町１丁目2162－３		



第485次調査　発掘区位置図　1/6,000

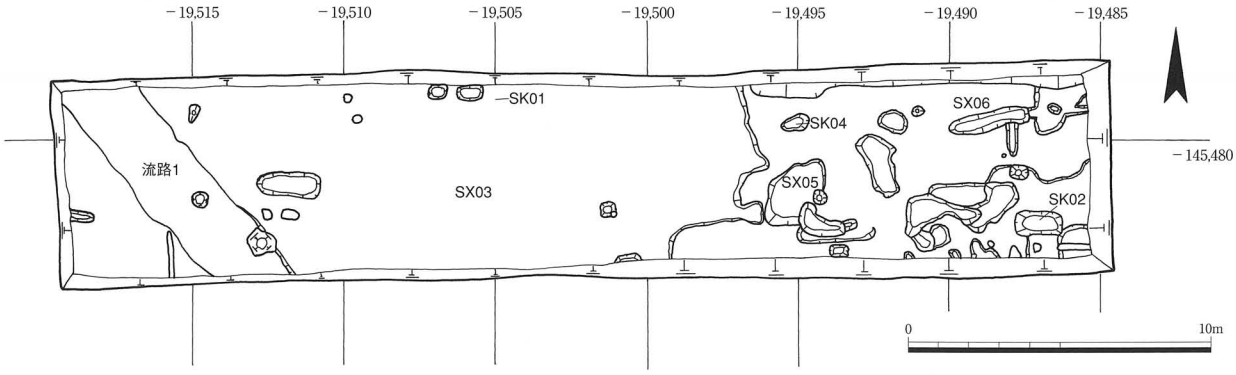


1　排水管埋設土
2　造成盛土
3　黒色土（耕作土）
4　灰茶色土（耕作土）
5　茶灰色土
6　淡灰茶色砂質土
7　茶灰色砂質土
8　淡茶褐色砂質土
9　淡茶灰色砂質土
10　淡褐灰色砂質土
11　茶褐色砂質土
12　濁灰褐色砂質土
13　淡茶灰色砂
14　暗紫灰色粘土（黄白色粘土混）
15　濁茶灰色砂
16　青灰色粘土
17　明青灰色粘土
18　茶灰色砂
19　黄白色粘土（地山）
20　暗灰色粘土（地山）
13～18は旧流路埋土

第485次調査　発掘区東壁土層図　1/80

調査地は、平城京の条坊復原では、一条南大路にあたり、調査地の北辺で一条南大路の北側溝が想定される場所でもある。調査地の北東約80mの地点（右京一条二坊十二坪内）で行なった市HJ第160次調査（昭和63年度）では、古墳時代から奈良時代にかけての流路跡、奈良時代以降の小土坑、南北方向の溝を検出している。右京二条二坊十二坪内で行われた調査（国第137次（昭和56 年度）、国第151－22次（昭和58年度）、市ＨＪ第116 次調査（昭和61年度））では、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、井戸、坪内道路、溝が検出されている。右京二条三坊一条南大路推定地で行われた調査（市HJ 第51次調査（昭和58年度））では、奈良時代の井戸、13世紀の井戸を検出したが、一条南大路の南側溝は検出されていない。今回の調査では奈良時代の遺構、特に条坊遺構の検出を目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、造成盛土、黒色土、灰茶色土、茶灰色土、淡灰茶色砂質土、淡茶灰色砂、暗紫灰色粘土（黄白色粘土混）、青灰色粘土、茶灰色砂と続き、現地表下1.5～1.8mで黄白色粘土に至る。西から東に向かっての下り勾配で、遺構検出は奈良時代の遺構面である淡茶灰色砂上面（標高は70.1～70.4m）と、地山である黄白色粘土上面（標高は69.5～70.0m）で行なった。淡茶灰色砂上面で検出した遺構としては、奈良時代よりも前の流路、８世紀の土坑、11世紀から12世紀にかけての土坑、中世の土坑を検出した。再度、黄白色粘土上面で遺構検出を行った。以下で主な遺構について述べる。

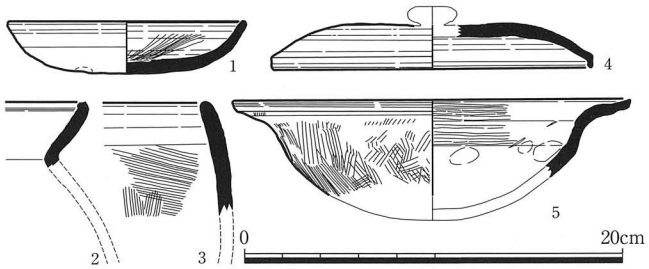


第485次調査　遺構平面図　1/250

流路１は、発掘区西で検出した。幅約2.4m、長さ約7.6m分を検出した。断面で確認した深さは約0.5mである。出土遺物がないので時期は不明だが、重複関係から後述のＳＸ03よりも古い。重複関係から奈良時代よりも前のものであると思われる。

ＳＫ01は、発掘区中央北で検出した平面隅丸方形の土坑。東西約0.9m、南北約0.5m、深さ約0.2mである。埋土は濁茶褐色砂質土で、８世紀の土師器杯・甕、須恵器杯・壷・鉢・蓋、墨書土器、製塩土器、壁土が出土した。ＳＫ02は、発掘区南東隅で検出した平面隅丸方形の土坑。東西約1.6m、南北約0.8m、深さ約0.2mである。埋土は暗灰褐色粘質土で、７世紀末から８世紀初にかけての土師器杯・高杯・甕、８世紀の須恵器杯・甕・壷、奈良時代の平瓦が出土した。ＳＫ01・02ともに８世紀に埋没したものと思われる。ＳＸ03は、発掘区中央で検出した平面不整形の土坑状遺構。発掘区外へと続くため規模は不明であるが、東西約18m、南北６m以上、深さは０.05～0.1mである。埋土は、暗紫灰色粘土で、弥生時代の甕、古墳時代の土師器、８世紀の土師器杯か皿・甕、須恵器杯・蓋、奈良時代の製塩土器、11世紀末から12世紀前半にかけての瓦器椀、時期不明の土師器皿が出土した。ＳＫ04は、ＳＸ03の東で検出した平面隅丸方形の土坑。東西約0.8m、南北0.2～0.5m、深さ約0.2mである。埋土は淡茶灰色砂質土で、古墳時代の土師器甕、８世紀の土師器杯か皿、須恵器杯・皿・甕、奈良時代の平瓦、12世紀の土師器皿が出土した。ＳＸ05は、ＳＫ04の南で検出した平面不整形の土坑。東西約2.0m、南北約２.５m、深さ０.05～0.2mである。埋土は茶褐色粘土（炭混）で、４世紀末～５世紀前半にかけての土師器甕・壷、古墳時代の須恵器、埴輪、８世紀の須恵器、中世の瓦器、時期不明のサヌカイト剥片、砥石が出土した。詳細な埋没時期は不明であるが、瓦器が出土しているので中世には埋まっているものと思われる。

この他に、発掘区全体に広がっている西から東に流れる流路がある。この流路の埋土である暗紫灰色粘土（黄白色粘土混）・青灰色粘土・茶灰色砂から遺物が出土していないので詳細な時期については不明であるが、重複関係から奈良時代以前のものであることはわかる。地山である黄白色粘土上面で再度遺構検出を行ったが、顕著な遺構は検出できなかった。



出土土器　1/4

出土遺物は、弥生土器、奈良時代の丸瓦・土師器・須恵器が遺物整理箱４箱分ある。奈良時代の遺物の中には、初頭の頃の特徴をもつ土器がある。ここでは、実測可能なものを掲載しておいた。以下に概略を記しておく。土師器杯Ｃ（１）、鉢（３）、鍋（５）、甕（２）、須恵器杯Ｂ蓋（４）がある。１の内面には１段の斜放射状暗文が施されている。２は口縁部が受け口状になっているのが特徴的である。１はＳＫ01、２はＳＫ02、３～５はＳＸ06から出土。平城京内でこの時期の土器が出土する例は少なく、平城京遷都前後の土器様相を知る手がかりになる資料である。

今回の調査で、奈良時代の一条南大路に関する遺構は検出できなかった。しかし、一条南大路の路面上と推定される場所であるにも関わらず、８世紀の土坑が掘り込まれている。奈良時代の大路をまたぐ宅地が存在していたとは考えにくいので、一条南大路の北側溝は発掘区の南側にあるものと思われる。古墳時代の遺物が出土しており、また市ＨＪ第160次調査でも古墳時代～奈良時代に埋没する流路跡が検出されているので、近くに古墳時代の集落遺構の存在する可能性が考えられる。

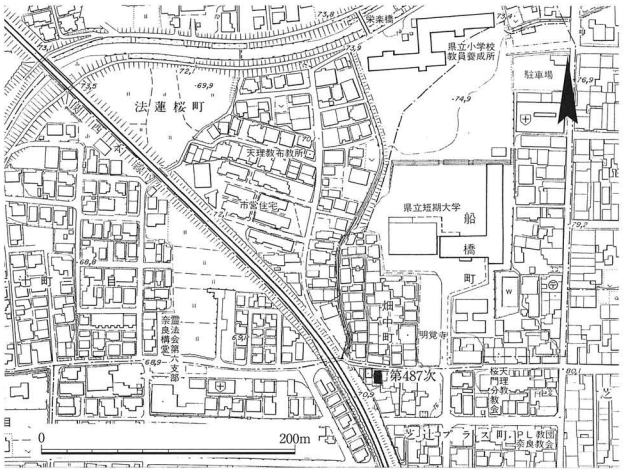
（山前智敬、三好美穂）

第485次調査　発掘区全景・淡茶灰色砂上面（北東から）

第485次調査　発掘区全景・黄白色粘土上面（北東から）

11. 平城京左京二条大路の調査　第487次

調査次数	ＨＪ第487次	調査期間	平成14年11月28日～12月９日
事 業 名	二条線地方特定道路整備事業	調査面積	50㎡
届出者名	奈良市長	調査担当者	久保清子
調 査 地	奈良市芝辻町75－３他		



第487次調査　発掘区位置図　1/6,000

Ⅰ　はじめに

調査地は、東から西に下がる丘陵の西縁部上にあり、平城京の条坊復原では、二条大路と東五坊坊間路交差点の南西に位置し、奈良町遺跡の西縁部に該当する地点でもある。調査地の北側において実施した、市HJ第434・439・444・448次調査（平成11年度）、第456次調査（平成12年度）では、この付近は奈良時代には平城京内の宅地として利用され、中世に至ると畑地となり、明治時代以降再び宅地化したことが判明している。また、二条大路北側溝を確認しており、その検出位置から今回の調査地内に二条大路南側溝を想定することができるため、大路及び条坊関連遺構の確認を目的として調査を実施した。

発掘区内の層序は、約１ｍの造成土下に、暗灰色粘質土（0.1m）、灰褐色砂質土（0.2～0.3m）と続き、地表下1.3mで黄褐色礫、灰褐色礫もしくは灰白色粘土の地山に至る。地山上面の標高は概ね71.7mである。

遺構はすべて地山上面で検出した。

Ⅱ　検出遺構

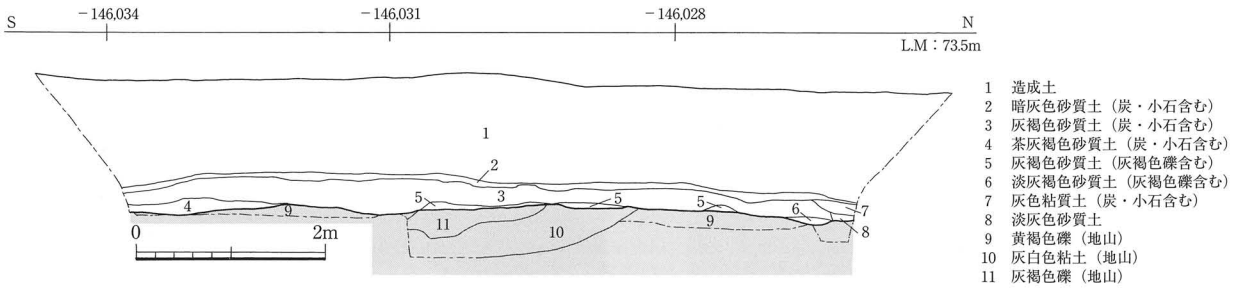
検出遺構は、溝２条と土坑５である。ＳＤ01・02は幅0.5～0.8m、深さ0.1mの素掘りの溝で、ＳＤ01からは14世紀頃の土師器羽釜、ＳＤ02からは14世紀頃の土師器Ⅲ・羽釜、瓦器、須恵器甕、時期不明の平瓦が出土した。ＳＫ03～07は平面不整形の径0.3～１ｍ以上、深さ0.1～0.2mの土坑で、ＳＫ03からは時期不明の平瓦、ＳＫ07からは14世紀頃の土師器羽釜が出土した。

出土した遺物には、弥生土器、奈良～鎌倉時代の須恵器、土師器、瓦器、輸入陶磁器、江戸時代初頭の国産陶磁器、平安時代以降の軒平瓦、時期不明の丸・平瓦、鉄釘があるが、全体の量は遺物整理箱１箱分と少ない。

Ⅲ　まとめ

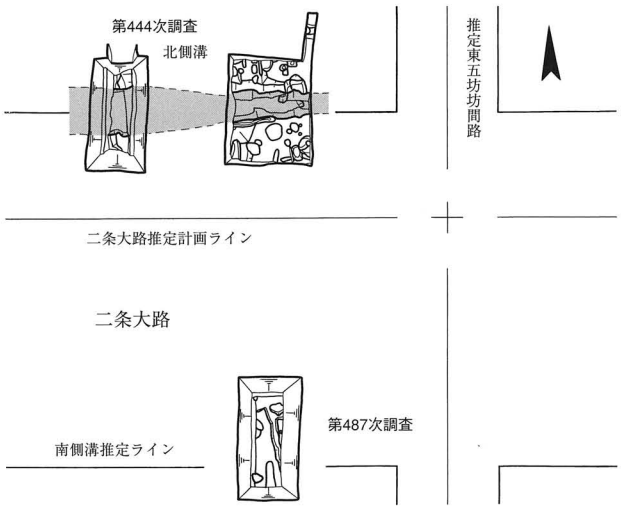
今回の発掘区内では、二条大路南側溝はなかった。その原因は少なくとも２つのことが考えられる。つまり、後世の土地利用の変化に伴い、遺構面が削平されていた場合、もしくは、南側溝が発掘区外に位置していた場合である。そこで、過去の条坊調査成果を基に、二条大路の条坊計画線と南側溝の位置について推察してみたい。

二条大路は、左京域では平城宮南面と東二坊地点及び東五坊地点で確認されており、その幅員は平城宮南面では側溝心々間距離で36.0～38.0m[1]、東二坊坊間路以西の東二坊地点では39.8m～40.6m[2]、坊間路東側の二坊十二坪南面では32.6m[3]である。二条大路計画線から南側溝までの距離は、北側溝までの距離のほぼ２倍にあたるため、計画線と道路心とが一致していないことがわかっている。調査地が位置する東五坊地点では北側溝が２地点で確認されている。それぞれの北側溝心の座標値は平成12年度県調査地点[4]ではＸ＝－146,005.50、Ｙ＝－

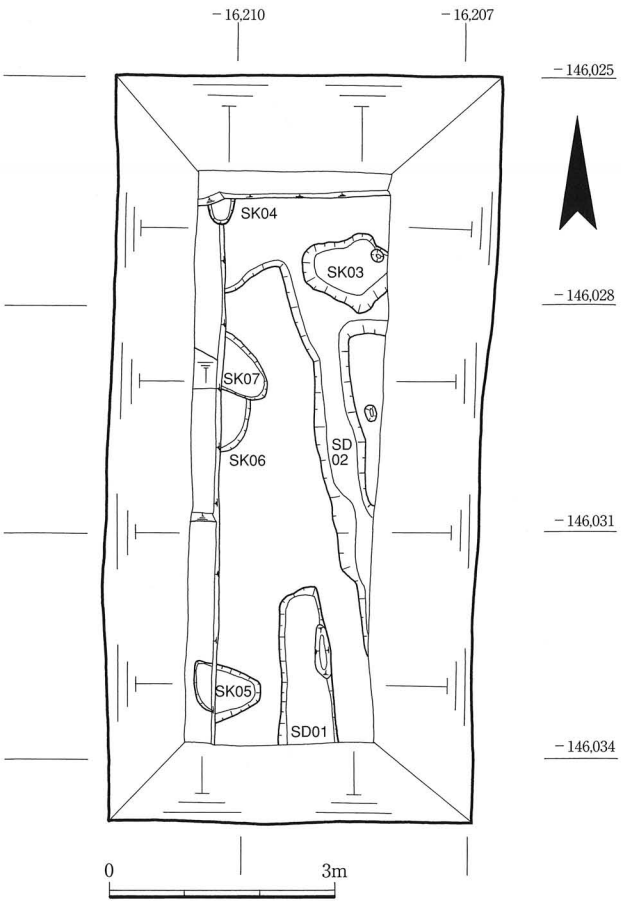


第487次調査　発掘区西壁土層図　1/80

第487次調査　発掘区全景（東から）



条坊概念図　1/600



第487次調査　遺構平面図　1/100

16,269.00、市HJ第444次調査地点ではX＝－146,004.00、Y＝－16,211.10である。この２地点間の振れはＥ１°29′02″Ｎで、東二坊地点北側溝心（X＝－146,004.84、Y＝－17,800.00）から市第444次北側溝心までの振れは、Ｅ０°１′49″Ｎである。次に条坊計画線の推定位置であるが、東二坊地点での大路の振れ（Ｅ０°11′28″Ｎ）が東五坊地点まで同じであると仮定し、東二坊地点での条坊計画線座標値（X＝－146,017.65、Y＝－17,800.00）を基準に計算すると、調査地付近ではX＝－146,012.35、Y＝－16,211.10の地点に大路の計画線が通ることになる。なお、調査地南側の県調査[5]で確認している三条条間北小路の道路心（X＝－146,144.50、Y＝－16,204.00）と小路の振れ（Ｅ０°11′37″Ｎ）を基に、Y＝－16,211.10地点の小路の道路心を計算すると、X＝－146,144.476付近を通ることになる。この地点での小路道路心と大路計画心間の距離は132.126m（約372大尺、446小尺）となり、条坊の１町に近い数値となる。続いて南側溝の推定位置については、東二坊以東での南側溝の検出例がないため、現時点でその位置を明確にすることは困難であるが、側溝心々距離を北から１：２に内分した位置に条坊計画線がくると仮定した場合[6]、前述の大路計画線から市第444次調査検出の二条大路北側溝の溝心までの距離は8.35m（約23.5大尺、28小尺）であるため、南側溝は計画線から、16.7m（約47大尺、56小尺）南の地点、X＝－146,029.05、Y＝－16,211.10つまり、今回の発掘区内を通ることになる。ただし、この場合、大路の幅員は約25mとなるため東二坊地点の幅員よりも狭くなる。そこで二坊十二坪南面での南側溝心（X＝－146,037.96、Y＝－17,726.00）から大路の振れ（Ｅ０°11′28″Ｎ）を基に計算した場合、発掘区内のX＝－146,031.95付近を通ることになる。この場合の幅員も27.95mと、まだ東二坊地点よりも狭いという問題は残るが、大路の南側溝は、削平されていたため、今回の発掘区内で検出できなかった可能性が高い。　（久保清子）

1）奈良国立文化財研究所「東院南方遺跡の調査」『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1992

2）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告-長屋王邸・藤原麻呂邸の調査-』1995

3）奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪　奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』1984

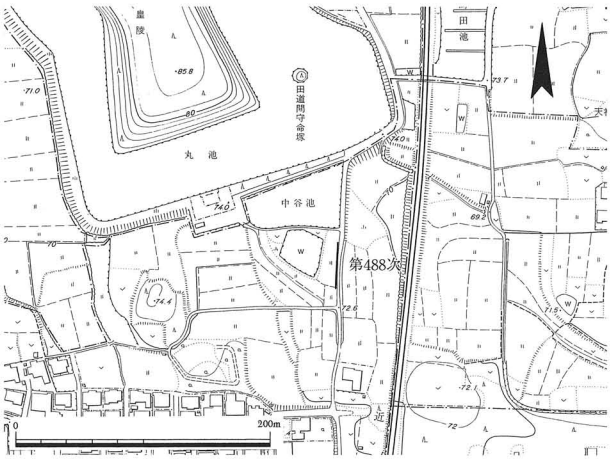
4）奈良県立橿原考古学研究所「左京二条五坊・三条五坊の調査」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）2000年度』2001

5）奈良県立橿原考古学研究所「Ⅰ.左京三条五坊七・八坪の調査」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）2001年度』2002

6）井上和人「古代都城制地割再考」『奈良国立文化財研究所研究論集Ⅶ』1985

12. 平城京右京四条・西二坊大路の調査　第488次

調査次数	ＨＪ　第488次	調査期間	平成14年12月２日～12月９日
事 業 名	市道中部第513号線道路改良工事	調査面積	37㎡
届出者名	奈良市長	調査担当者	中島和彦
調 査 地	奈良市五条一丁目516番地		



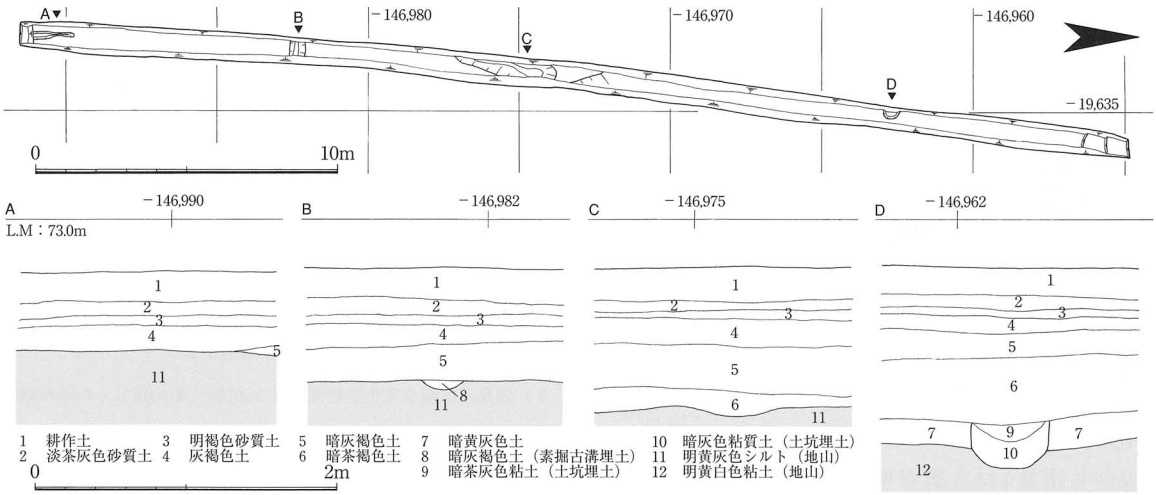
第488次調査　発掘区位置図　1/6,000

第488次調査　発掘区全景（南から）

調査地は、垂仁天皇陵古墳の南側で、北西から南西にのびる台地上にある。平城京の条坊復原では西二坊大路にあたり、右京四条二坊十三坪と四条三坊四坪の間にある。調査は道路の拡幅部分のみで、現在の道路の西側に沿って幅約１m、長さ約37mの長細い発掘区を設定した。

発掘区南半部の層序は、上から耕作土（１）、淡茶灰色砂質土（２）、明褐色砂質土（３）、灰褐色土（４）と続き、地表下約0.5mで明黄白色シルト(11)の地山となる。北半部では灰褐色土の下に暗灰褐色土（５）、暗茶褐色土（６）、暗黄灰色土（７）と続き、地表下約1.2mで明黄白色粘土(12)の地山となる。地山は北に向かい下降する。発掘区北半部の暗茶褐色土層からは、多くの奈良～平安時代の瓦と共に、12世紀後半～13世紀初めの瓦器椀が出土した。

調査の結果、土坑２、中世素掘り溝２条を検出したが、西二坊大路に関する遺構は確認出来なかった。土坑からは土器、瓦が少量出土したが、時期等詳細は不明である。出土遺物には、瓦が遺物整理箱２箱分、土器が１箱分、砥石１点がある。これらの大半は発掘区北半部の暗茶褐色土層出土である。瓦には平安時代以降の唐草紋軒平瓦１点と磚１点の他、奈良～平安時代の丸瓦17点（2.3kg）、平瓦200点（25.5kg）、及び丸平不明38点（1.3kg）がある。土器には平安時代末前後の瓦器・土師器の他、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古墳時代の埴輪がある。今回の調査では、小面積のわりに出土瓦が多いことが指摘出来るが、瓦の来歴は不明である。　（中島和彦）



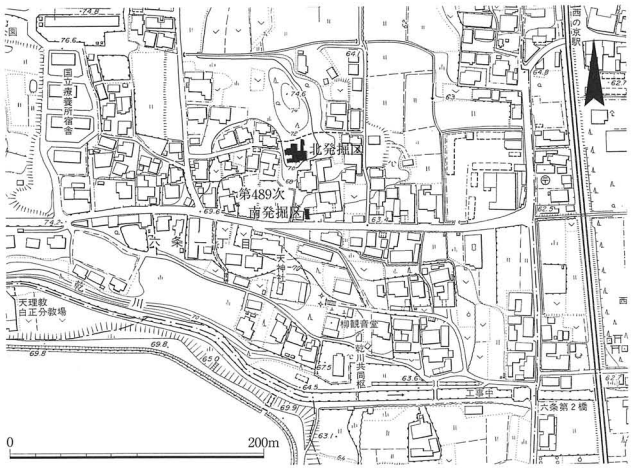
第488次調査　遺構平面図　1/250　発掘区西壁土層図　1/50

13. 平城京右京六条三坊六坪・六条野々宮古墳の調査　第489次

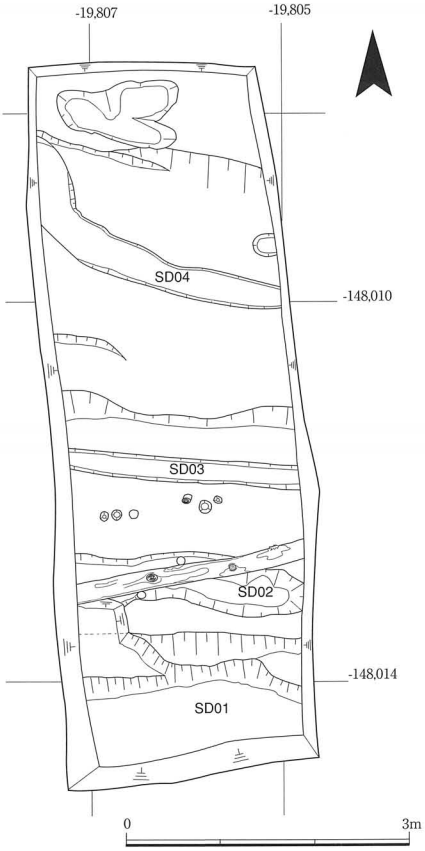
調査次数	ＨＪ第489次	調査期間	平成14年12月９日～平成15年１月11日
工事内容	個人住宅新築	調査面積	180㎡
届出者名	個人	調査担当者	三好美穂
調 査 地	奈良市六条一丁目491－1、492、497－3、731－4		

今回の調査地は、平城京右京六条三坊六坪にあたり、敷地面積が1坪の約1/10にも及ぶ広大なものである。敷地北半部は、西の京丘陵から東へ派生している尾根の一部で、畑地として利用されており部分的に平坦にならされていた。地表面の標高は69.9～70.7mである。敷地の南半部は、周辺の地形からみて、本来は尾根裾から谷部に移行する南下がりの斜面地であったと思われるが、平坦に造成して宅地として使われていた。標高は概ね64.5mである。届出による工事内容は、尾根から南の宅地にかけて個人住宅を建設するというものであったため、尾根上と下の宅地の２箇所に分けて発掘区（北・南発掘区）を設定した。調査は、敷地の南辺に想定されてる五・六坪の坪境小路北側溝の検出及び、尾根部の遺構の状況を把握することを目的として実施した。発掘区が２箇所に分かれているため発掘区ごとに記す。

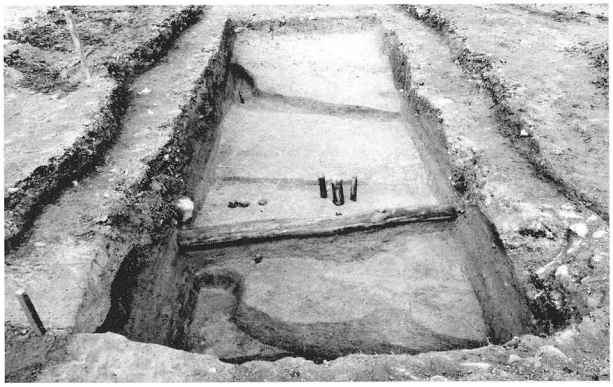
南発掘区　敷地の南辺中央部に東西2.5m、南北7.5mの発掘区（面積18.75㎡）を設定して行った。発掘区内の層序は、発掘区の中央部付近から南端では、撹乱坑の埋土A（0.3～0.5m）、旧耕土A（0.1m）、撹乱坑埋土B（0.2m）、旧耕土B（0.1m）、床土（0.02～0.1m）、中世の土器を包含する暗灰色粘砂（0.1m）・灰色粘砂



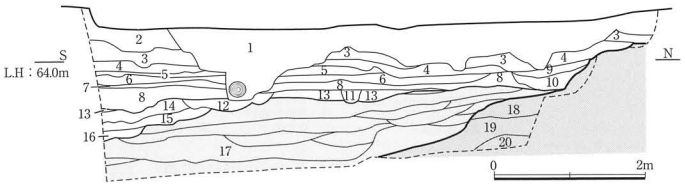
第489次調査　発掘区位置図　1/6,000



第498次調査　南発掘区遺構平面図　1/80



第489次調査　北発掘区全景（南から）



1　撹乱（黒褐色粘砂）
2　盛土（褐色土）
3　耕土（黒褐色粘土）
4　耕土（黒褐色粘砂）
5　明茶褐色土（Fe多い）
6　暗灰色粘砂
7　灰色粘砂
8　淡灰色粘砂
9　暗黄褐色粘砂
10　淡黒灰色粘土
11　灰色砂
12　灰色粗砂
13　黄灰色粗砂
14　青灰色粗砂
15　青灰色砂
16　暗灰色粘土（14～16；SD01埋土）
17　灰色系と褐色系砂と粘土の互層（谷埋土）
18　黄褐色粘土（地山）
19　暗緑灰色砂（地山）
20　灰白色砂（地山）

第489次調査　南発掘区西壁土層図　1/100

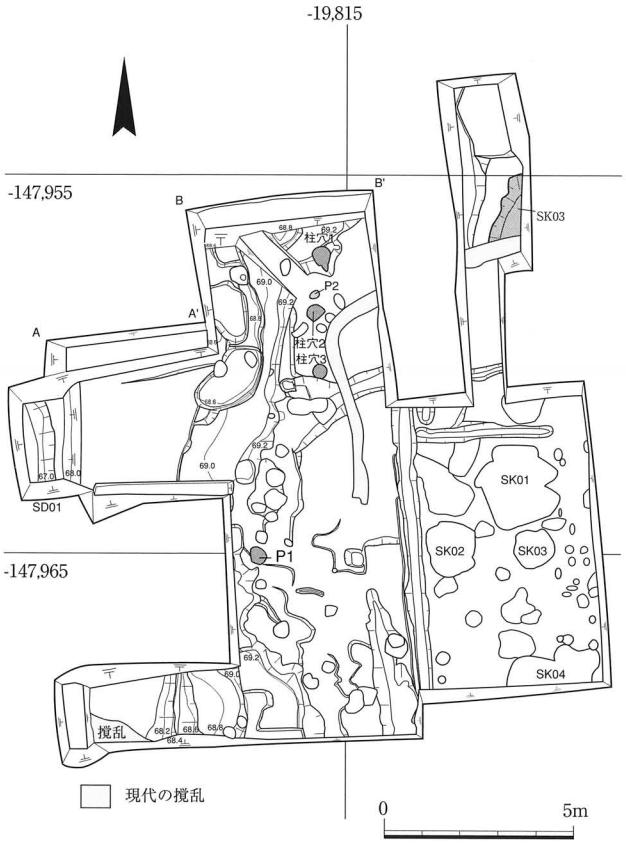
（0.08m）・淡灰色粘砂（0.2m）と続き、地表下約0.6mで地山に至る。発掘区の北端は、撹乱坑の埋土（0.1～0.6m）を除去するとすぐに黄褐色粘土の地山になる。遺構は地山直上で検出した。地山直上の標高は、発掘区北端で64.4m、中央から南端では63.6mである。

SD01は、五坪と六坪の坪境小路北側溝と思われる。溝内には、古墳時代の埴輪、奈良時代土師器・須恵器・瓦、平安時代土師器・灰釉陶器、平安時代から鎌倉時代の瓦器等を包含していた。中世の遺物を包含することから、後世になって掘り直しがったのかもしれない。SD01の座標は、溝最深部でX－148,014.800m、Y－19,806.000m。SX02は、遺構の性格を明らかにすることができなかったが、SD01のあふれである可能性も考慮しておきたい。SD03・SD04は、SD01と重複して検出した素掘りの溝である。いずれもSX02よりも古い。SD03からは、円筒埴輪が１点出土しており、両者とも古墳時代の溝の可能性がある。SD05は、発掘区の北西端から、やや弧を描くような形で発掘区の東端へとのびている。溝内には、瓦器の破片を包含する灰色砂が堆積していた。

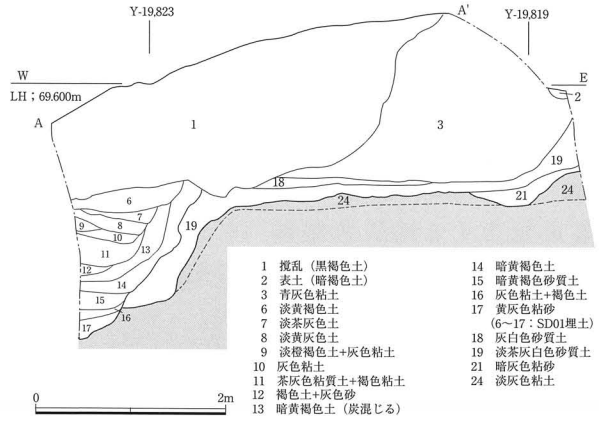
下層の調査　SD01の下には灰色系及び褐色系の砂と粘土の互層が認められたので、西壁に沿って地表面から深さ2.2mまで掘り下げた。調査の結果、X－148,008.000m付近で、地山が南に下り勾配になる部分を検出した。発掘区南半部では湧水の著しい灰白色砂に達したため掘り下げを断念した。出土遺物は、黄褐色粘土からは土師器小片が１点出土。おそらく、条坊道路が建設される前は、現在よりも深い谷地形であったことが伺えるが、最終的に埋まった時期は明らかにすることができなかった。

第489次調査　北発掘区中央付近（北から）

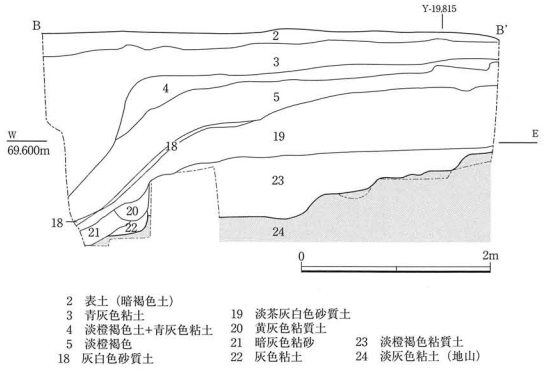
北発掘区　調査は、建物基礎と切土される箇所に、まず東西５m、南北15mの発掘区を設定して行った。調査を進めるにしたがって、円筒埴輪の据え付け穴や墳丘の一部と考えられる土層を確認したため、古墳の主体部が想定できる箇所と古墳の北側と西側の状況を確認するためにそれぞれ拡張区を設けた。最終的な発掘面積は合計



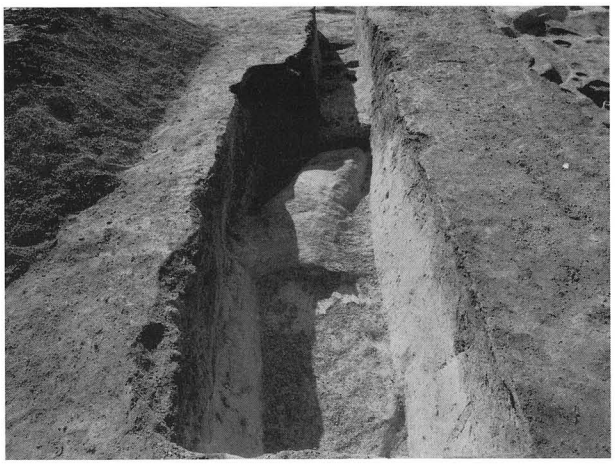
第489次調査　北トレンチ遺構平面図　1/200



第489次調査　北西拡張区北壁土層図　1/80



第489次調査　北発掘区北壁土層図　1/80



第489次調査　北拡張区（北から）

SD01堆積土層状態（南から）

161.45㎡になった。発掘区の基本的な層序は、２：暗褐色土（表土・0.2m）、３：青灰色粘土（0.2m）、４：淡橙褐色土（0.15m）、５：橙褐色土（0.2m）、18：灰白色砂質土（0.15m）、19：淡茶灰白色砂質土（0.1m）と続き、地表面下約0.9mでⅦ：黄褐色礫または淡灰色粘土の地山に至る。敷地の西端部付近（Y－19,817.000）からは、３層目以下の土層が西に向かって急な下り勾配の堆積となるが、Y－19,819付近では再び水平堆積になる。発掘区の西半部では、５層と19層目の間に厚さ２cmの灰白色砂質土が見られる。４層、18層には奈良時代の土器・瓦、鎌倉時代の瓦器が、19層には埴輪、奈良時代の土器・瓦、鎌倉時代の瓦器が包含されていた。遺構は、地山直上（標高：発掘区東半部69.3～69.5m、発掘区西端68.3～68.6m）で検出した。

古墳時代の遺構　発掘区の西と北で、埴輪の据え付け穴（Ｐ１・Ｐ２）を検出した。いずれの据え付け穴にも円筒埴輪が残存していた。

Ｐ１は、直径0.45mの平面円形の掘形である。掘形内には直径30cmの円筒埴輪が据えられており、埴輪の上部は欠損しているが、底部から15cm程残存していた。タガの形状やハケメの調整痕跡からみて５世紀前半代のものと考えられる。埴輪の内側と裏込めに堆積していた土は良く似ており、３㎜程度の小礫を含む固くしまった黄褐色土で、肉眼では差異を観察することができない。P2の掘形内には円筒埴輪が据えられているが、掘形の形状と合わせるかのように円筒埴輪を押し潰して設置されていた。時期的には、Ｐ１同様、５世紀前半代のものと考えられる。Ｐ１・Ｐ２付近では、円形の小穴を幾つか検出している。いずれも、深さは２～３cmと浅く出土遺物もないので時期の特定はできないが、この中には埴輪の据え付け穴になるものが含まれている可能性はある。主体部の想定箇所は後世の遺構があるだけで、古墳に関わる遺物や遺構は検出できなかった。

奈良時代の遺構　埴輪の据え付け穴Ｐ２の付近で柱穴１～３を、北の拡張区で土坑SK４を検出した。

柱穴１は一辺0.5mの掘形で、検出面からの深さは0.4mある。掘形内から土師器・須恵器の破片が出土した。柱穴２は、一辺0.4mの掘形で、深さは0.2m。柱を抜き取った痕跡があり、中から土師器甕の破片が出土した。柱穴３は、掘形の一辺が0.3mと小さい。深さは0.2mである。土師器の破片が出土。柱穴１～３は、柱間が北から2.0－1.2mと不揃いではあるが、柱筋が並んでいるので塀のような施設になる可能性も考えられる。遺物が出土しているものの、破片が多いため詳細な時期は不明。土坑４からは、奈良時代後半の土師器・須恵器が出土した。

江戸時代の遺構　東拡張区で土坑SK01～04、西拡張区で濠状遺構SD01を検出した。

SK01～04は、江戸時代の土師器皿と共に焼けた壁土が大量に包含されている暗褐色土が堆積していた。この壁土は、窯壁が粉砕されて捨てられた可能性がある。

濠状遺構SD01は、19層上面で検出した。深さは1.7mまで確認したが、それ以上の掘り下げは断念した。濠内の埋土は、一挙に埋められたというよりも、序々に土が堆積したような状態をしめしている。埋土内からは、埴輪、奈良時代瓦、瓦器、江戸時代軒丸瓦等の破片が少量出土した。SD01がいつの時代に掘られたのか断定はできないが、江戸時代よりも古い可能性もある。立地条件を考慮すると、防御施設的な目的で作られたものかもしれない。

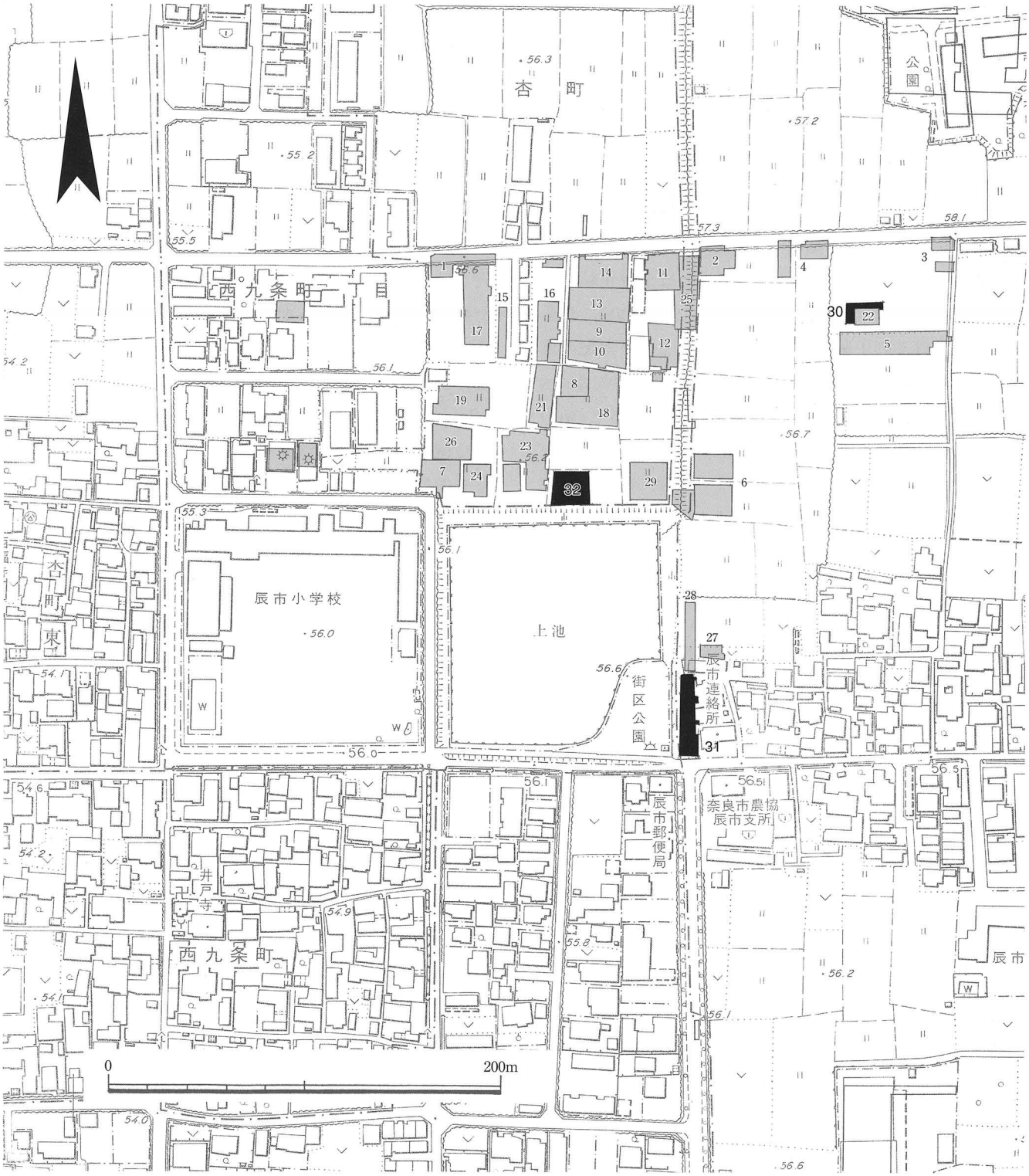
まとめ　今回の調査では、多くの所見を得ることができた。今回の古墳の発見により、周辺にも古墳が存在する可能性が大きくなった。

さらに奈良時代の遺構を検出できたことは貴重な発見である。包含層からも奈良時代の瓦が多く見つかっていることなどから、瓦を葺いた建物が近くに存在していたことが推察できよう。　（三好美穂）

14. 平城京東市跡推定地の調査　第30～32次

平城京東市跡推定地の調査は、これまで22年間継続して発掘調査を実施している。今年度は、3件の調査を実施した。本文中の遺構番号は、東市跡推定地内で付けている通し番号である。

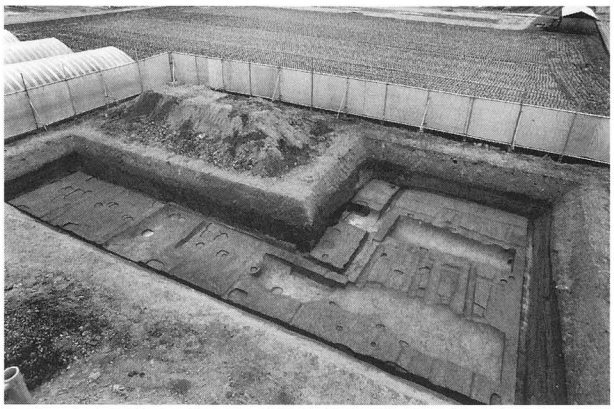
調査次数	届出者名	事業名 or 工事内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
30	個人	共同住宅新築	東九条町 443-1 他	H 14.11.5 ～ 11.1	142 ㎡	中島
31	奈良市長	西九条佐保線地方特定道路整備事業	東九条町 433-4 他	H 15.1.10 ～ 3.1	340 ㎡	中島・久保清
32		範囲確認調査	杏町 590	H 15.1.14 ～ 2.24	300 ㎡	三好



東市跡推定地内発掘調査位置図　1/3,000

平城京東市跡推定地の調査　第30次

はじめに　東市跡に推定されている五・六・十一・十二坪の４坪の内、今回の調査地は十一坪にあたる。十一坪は中央に東堀河が南北に流れ、坪は東西に分断される。調査地はこの東半部の北側にある。建設予定地南東隅では、市TI第22次調査を行い、奈良～平安時代の坪内道路、井戸、柱穴を確認している。坪内道路は十一坪の北から約1/4の位置にあり、十一坪内を分割利用していたことが想定できた。今回の発掘区は、この第22次発掘区の西と北に隣接して設定し、坪内道路の西側延長部と、道路北側の利用状況の資料が得られるものと考えた。



第30次調査　発掘区全景（北西から）

検出遺構　発掘区内の層位は、発掘区東側で上から造成土、耕作土、淡黒灰色砂質土、暗灰色砂質土、褐色砂質土、暗灰褐色砂質土で、地表から約1.2mで地山の明黄灰色シルトまたは明黄灰色粘土に至る。地山直上面の標高は約56.0mである。

検出した遺構には、坪内道路とその南北両側溝の他、第22次調査分と合わせて掘立柱建物４棟、掘立柱塀６条、土坑４、中世素掘り溝がある。

坪内道路SF336は、路面幅が約1.8mあり、第22次調査分と合わせて長さ約17m分を検出した。路面は地山のままで舗装等はない。北側溝SD334は、幅約1.0～1.8m、西端で深さ約0.3mある。西側が深く、西側約10mにある東堀河に排水していたと考えられる。南側溝SD335は、幅約0.9～1.2m、東端で深さ約0.4mある。西に向かい浅くなり、第30次発掘区内で途切れる。十一坪の東側にある坪境小路西側溝SD009（市TI第３次・第５次調査）と比べ、SD335の方が溝底のレベルは低く、東側への排水は考えにくい。また南側の市TI第５次調査でも検出されておらず、SD335は両端が途切れる溝になるのであろうか。SD334・SD335ともに、８世紀後半～９世紀初めの土器が出土し、SD334からはガラス坩堝が出土した。

SF336の北側には、溝状の土坑SK545とSK547、不整形な土坑SK546がある。深さはいずれも0.1～0.4mと浅い。SK545はSD334に平行して、SK547はSD334に直交してあり、SK546と合わせ鈎形に曲がる一連の溝状の遺構になると考えられる。性格は不明であるが、後述する掘立柱塀SA540との関係から、宅地の区画に関するものかと考える。重複関係からSB535・SA339・539・542より新しい。いずれも８世紀後半～９世紀初めの土器が出土し、SD334と同時期と考えられる。

掘立柱建物のうち全容がわかるものは、SB535の１棟のみで、他の３棟は発掘区外へ続く。詳細は表に記す。いずれも柱穴の規模から中小規模の建物と考えられる。

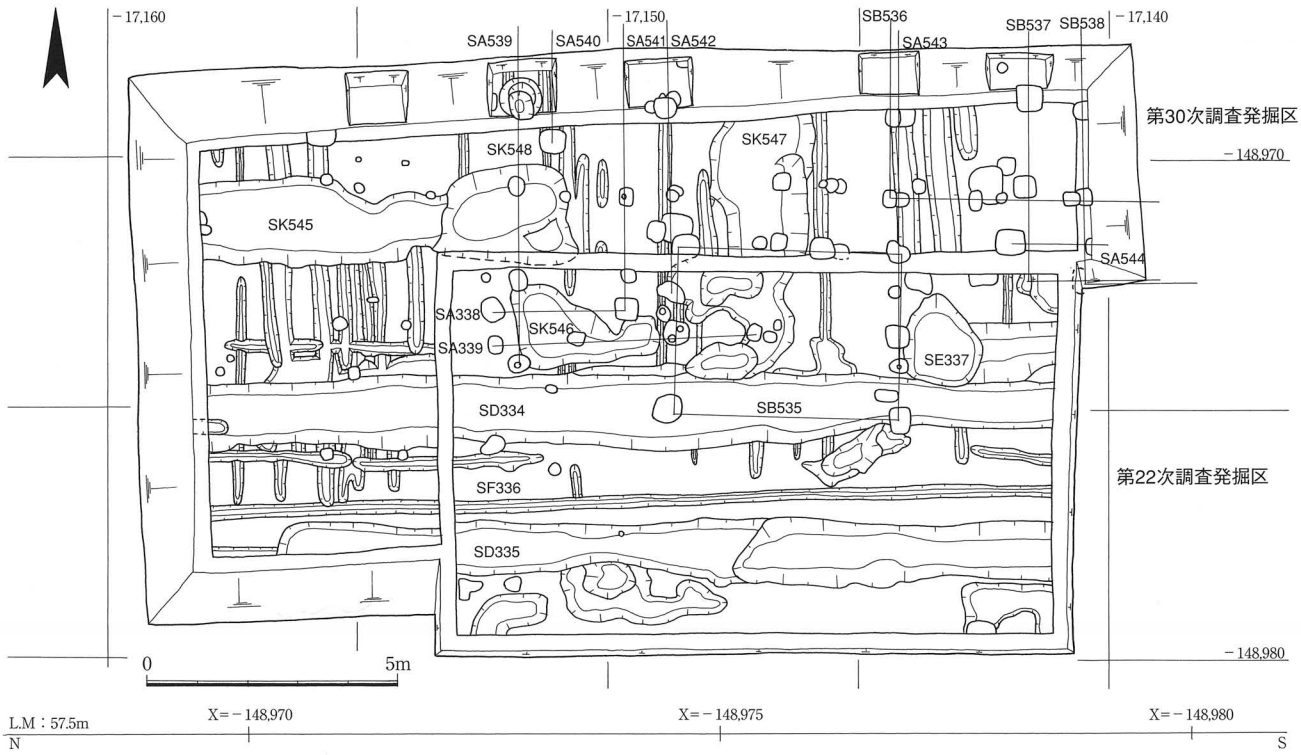
掘立柱塀は６条検出しているが、いずれもSD334以北にあり、SF336施工以降のものと考えられる。SA539とSA543はSD334の北岸を起点に北へ続く塀である。SA540は、SK545の北東端を起点に北へ続く塀と考えられる。SA544は、SD334の北岸から約2.7m北に平行する塀である。西側延長線上にはSK545の南端があり、両者は同時期の可能性が考えられる。なおSA544は、九坪の東西１／４のライン付近にあり、SF336に開く門の可能性も考えられる。この場合SF336をはさんで南側にも柱穴が１つあり、ここにも門が想定できよう。

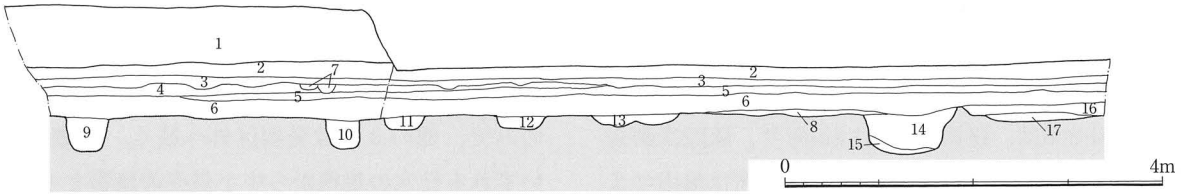
第22次調査発掘区内のSA338とSA339は同発掘区内で終わり、それぞれ２間と３間になることがわかった。

今回の調査で、十一坪内の遺構は、坪内道路SF336の

掘立柱建物・塀一覧表

	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	備考
SA338	東西	1	2.7		2.7		SA541 と接続
SA339	東西	3	5.4		1.8 等間		門か？
SB535	東西	3 × 2	4.5	3.3	1.5 等間	1.65 等間	SE337 より新、SD334・SK547 より古
SB536	東西	3 以上× 2 以上	3.6 以上	1.5 以上	1.8-1.8- ？	1.5- ？	SB538・SA543 より新
SB537	？	2 以上× 1 以上	3.6 以上	？	1.8-1.8- ？	？	
SB538	？	2 以上× 1 以上	3.4 以上	？	1.7-1.7- ？	？	
SA539	南北	3 以上	5.4 以上		1.8 等間		SK545・548 より古
SA540	南北	1 以上	？		？		
SA541	南北	1 以上	2.25 以上		2.25- ？		SA338 と接続
SA542	南北	2 以上	3.6 以上		1.8-1.8- ？		
SA543	南北	3 以上	5.1 以上		1.5-1.8-1.8- ？		SE337 より新、SB536 より古
SA544	東西	1 以上	1.5 以上		1.5 以上 - ？		門か？





1 造成土
2 耕作土
3 淡黒灰色砂質土
4 暗灰色砂質土
5 褐色砂質土
6 暗灰褐色砂質土
7 淡灰色砂質土
8 暗灰色粘質土
9 暗茶灰褐色土
10 暗茶灰褐色土
11 暗灰褐色土
12 暗灰褐色土
13 暗茶灰色粘質土
14 暗茶灰色粘質土
15 暗茶灰色粘質土（やや暗い）
16 暗茶褐色土
17 暗茶褐色砂質土
18 明黄灰色シルト

遺構平面図　1/150　発掘区東壁土層図　1/80

施工前後で大きく２時期に分かれることがわかる。遺構の組み合わせ等の詳細は不明だが、以下に概要を記す。

１期は、SF336施工以前の時期。掘立柱建物SB535と、さらに古いSE337の時期がある。坪内の区画等は不明である。井戸出土土器から８世紀中頃と考えられる。

２期は、SF336施工後の時期。十一坪東側を1/4以下に区画する。遺構の重複関係から３群以上に細分される。

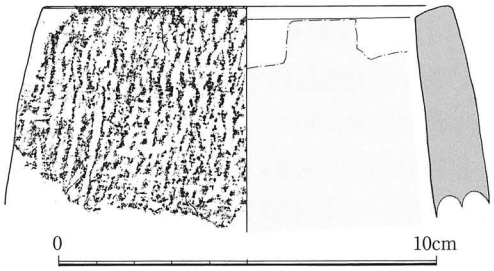
a群　北側溝SD334の北岸からはじまる南北塀SA539と、それと同時期の遺構群。

b群　SK545以下一連の土坑群とそれらと同時期の遺構群。出土土器から８世紀後半～９世紀初めと考えられる。

c群　SA338・541等のa・b群以外の遺構群。さらに細分の可能性もある。

これらの内、a群がb群より古いことは確認出来るが、c群の前後関係については不明である。

２期の特徴として、南北方向の塀の多さが指摘出来る。SF336に間口を開けたかのような小規模な区画が見て取れよう。十一坪の北東隅は、西に東堀河があり、北と東に築地塀が推定されており、築地に直接門を開かない限り、敷地内への進入は坪内道路からのみとなる。発掘区内の宅地利用には、このような規制が大きく働いていることは確かである。一方SF336の南側でも、南北棟建物が多いことが明らかになっている（市TI第５次調査）。塀による区画はないが、SF336の両側には、南北に細長い区画が東西にならぶ可能性が指摘出来よう。



SD334出土ガラス坩堝　1/2

出土遺物には、遺物整理箱１箱の土器と、少量の瓦類がある。土器の大半は坪内道路北側溝SD334とSK545出土である。いずれも８世紀後半～９世紀初めの土師器・須恵器である。SD334からはガラス坩堝３点が出土した。３点とも同一個体と考えられ、口径約10.8cmある。外面は縄目タタキ痕跡が残り、内面には黄緑色のガラスが付着する。瓦類は古代の丸瓦１点、平瓦８点、及び丸平不明５点あるのみで、合計約0.6kgにすぎない。（中島和彦）

平城京東市跡推定地（東三坊坊間路）の調査　第31次

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、東市跡推定地内を南北に通る東三坊坊間路に相当し、調査地南端では八条大路との交差点が想定される地点でもある。調査地北隣で、平成13年度に実施した市TI第27・28次調査[1]では東三坊坊間路、奈良・平安時代の建物、井戸、土坑及び鎌倉・室町時代の溝、建物を検出している。また、調査地南西の現県道下では、平成11年度の奈良県教育委員会による発掘調査[2]で中世の流路が確認されており、「中世辰市」の状況を知る手がかりを得ている。

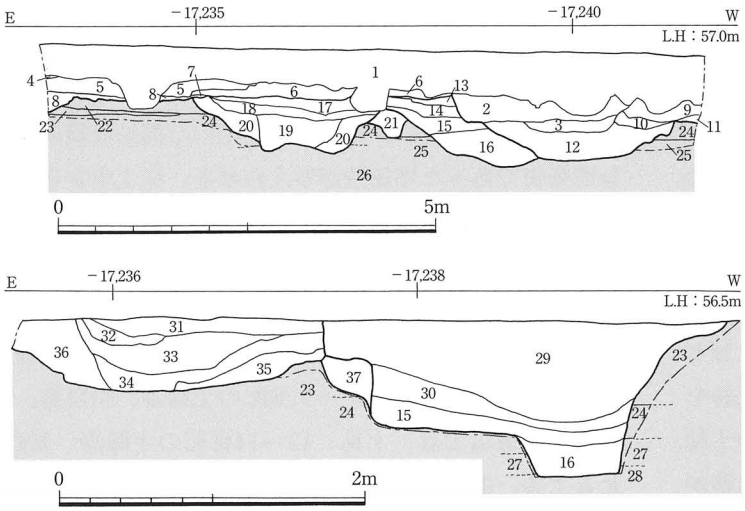
今回は、平城京の条坊関連遺構並びに中世遺構の検出を目的として調査を実施した。

発掘区内の層序は、上から造成土（0.3～0.8m）、耕土（0.1～0.3m）、淡灰色砂質土（0.1m）、橙灰色砂質土（0.05m）、茶灰色砂質土（0.2～0.3m）と続き、地表下0.8mで黄褐色粘土もしくは黄褐色砂、茶灰色砂の地山に達する。発掘区南半は後世に削平を受けて一段低くなっており、造成土直下もしくは耕土の下で地山に達する。地山上面の標高は、北端で56.6m、南端では56.0mで、遺構はすべて地山上面で検出した。

Ⅱ　検出遺構

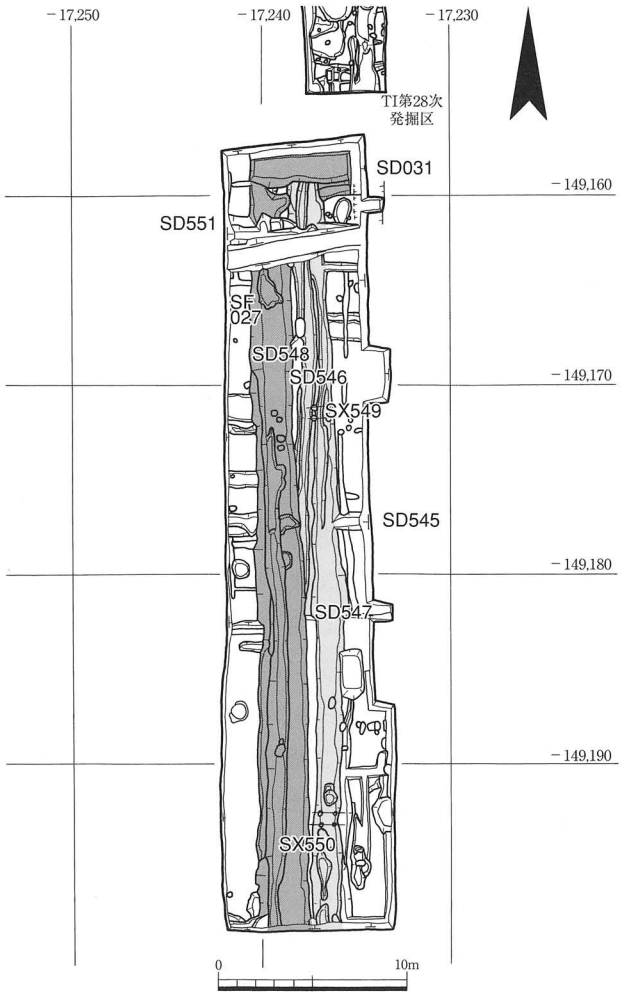
奈良時代　東三坊坊間路及び同東側溝がある。東三坊坊間路ＳＦ027は、東側溝ＳＤ031の西肩から７m分を検出した。路面部分は中世に溝が掘削されているため、当初の様相は不明である。東側溝ＳＤ031は、幅1.2m以上、検出面からの深さ0.3mである。両肩部分が中世に削平されているため、溝心の位置を特定できないが、側溝最深部での座標値は、X＝－149,160.30、Y＝－17,234.23で、北隣の調査地点（TI第28次）の溝心の座標値X＝－149,144.00、Y＝－17,234.50に近い数値となっている。埋土中からは、８世紀末～９世紀初頭の土師器皿Ａ１点、軒丸瓦6133型式Ａ種が１点出土した。なお、発掘区北端に位置する旧畦畔より南側については、後世に削平されていたため、八条大路との交差点部分は残っていなかった。

鎌倉・室町時代　素掘りの溝５条と掘立柱列２条がある。ＳＤ545は幅0.7～1.2m、検出面からの深さ0.1～0.35mで、断面形がＵ字形の東西方向の素掘りの溝である。埋土中からは、８～９世紀の土師器、黒色土器Ａ類、須恵器と、12～14世紀の土師器、瓦器の他、奈良時代及び平安時代以降の丸平瓦が遺物整理箱１箱分出土した。重複関係からＳＤ546・547・548よりも古い。ＳＤ546は南北方向の素掘りの溝で、後にＳＤ547・548の掘削により壊されているため、溝底部分のみが残存していた。検出幅は0.6～0.8m、検出面からの深さ0.3mである。埋土中からは８～９世紀の土師器、黒色土器Ａ類、須恵器、緑釉陶器、土馬、10～11世紀の土師器、須恵器と12～14世紀頃の土師器、瓦器、須恵器の他、奈良時代及び平安時代以降の丸平瓦、鉄釘、鉄滓、動物の骨が遺物整理箱１箱分出土した。重複関係からＳＤ547・548よりも古い。ＳＤ547は幅1.3～2.5m、検出面からの深さ0.5～0.7m、断面形が逆台形の南北方向の素掘りの溝で、北隣の調査（市TI第28次調査）で検出している鎌倉時代の溝ＳＤ503に続く可能性が高い。埋土は大きく２層に分けることができ、その堆積状態から１度掘り直しが行われていたことが考えられる。溝の東肩部分に特に集中して13世紀後半～14世紀初頭頃の土師器皿と瓦器椀が、溝の東側から大量に投棄されていた。埋土中からは、６世紀代の土器、８～９世紀の土器、土製品、10～11世紀代の土器

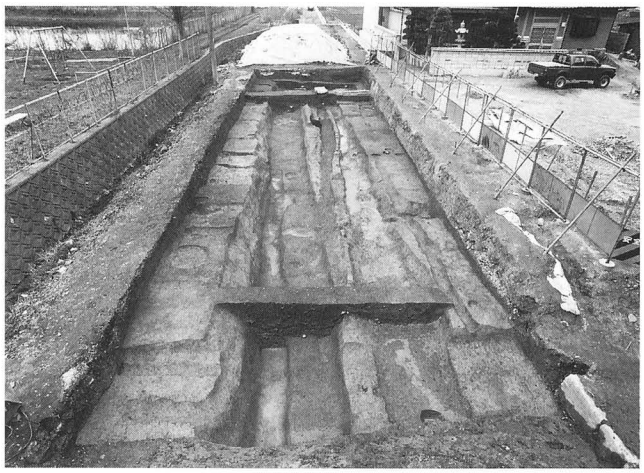


1　造成土
2　黄褐色粘土
3　暗灰色粘土（桟瓦含む）
4　褐色砂
5　褐色粘質土
6　灰色粘砂土（作土）
7　灰褐色砂質土
8　褐灰色砂質土
9　灰褐色砂質土
10　灰色砂
11　褐色砂質土
12　灰色砂
13　灰色砂と褐色粘土の混合土（SD548埋土）
14　茶褐色シルト（SD548埋土）
15　灰褐色シルト（SD548埋土）
16　灰色砂と灰色粘土の混合土（SD548埋土）
17　茶灰色砂と灰色粘土の混合土（SD547埋土）
18　茶灰色砂（SD547埋土）
19　灰色砂と黄褐色粘土ブロックと暗灰色粘土ブロックの混合土（SD547埋土）
20　暗灰色粘土と灰褐色砂の混合土（SD547埋土）
21　黄褐色砂と灰色粘土の混合土（SD546埋土）
22　黄褐色砂（地山）
23　黄褐色粘土（地山）
24　暗褐色粘土（地山）
25　灰褐色砂（地山）
26　明青灰色シルト（地山）
27　黄灰色粘土（地山）
28　灰色粘土（地山）
29　茶褐色シルトと灰褐色砂の混合土（SD548埋土）
30　茶灰褐色砂質土（SD548埋土）
31　茶灰色砂質土と黄褐色粘土の混合土（SD547埋土）
32　褐灰色砂質土（SD547埋土）
33　黄褐色粘土と茶灰色砂の混合土（SD547埋土）
34　灰色砂質土（SD547埋土）
35　灰褐色砂質土（SD547埋土）
36　茶灰褐色砂質土（SD547埋土）
37　暗灰色砂質土と灰褐色砂の混合土（SD546埋土）

第31次調査　発掘区南壁土層図　1/100（上段）、SD546～SD548（X＝－149,181mライＮ）土層図　1/50（下段）



第31次調査　遺構平面図　1／400



第31次調査　発掘区北半部（南から）

第31次調査　発掘区南半部（南から）

が合わせて遺物整理箱10箱、12～14世紀の土器が遺物整理箱22箱の他、奈良時代及び平安時代以降の軒瓦、丸平瓦、熨斗瓦、鬼瓦、面戸瓦、磚が合計遺物整理箱21箱の他、神功開珎２点、祥符元寶１点、判読不能の銅銭２点、鉄製刀子・釘、鉄滓、不明銅製品、銅滓、鞴、炉壁、ガラス玉、砥石、サヌカイト剥片、建築部材と考えられる凝灰岩、炭化物、動物の骨がそれぞれ少量出土している。重複関係からＳＤ545・546よりも新しい。ＳＤ548は幅1.3～2.6m、検出面からの深さ0.7～1.0m、断面形が逆台形の素掘りの溝で、発掘区北端で東に曲がる。溝の岸の傾斜は東西で異なり、東岸が緩やかであるのに対して、西岸は急である。中世集落の環濠は、集落の外側にあたる岸と内側にあたる岸の傾斜が異なる場合が多いことから、この溝についても環濠のような働きをしていた可能性が考えられる。溝の埋土は大きく２層に分けることができ、上層埋土には多量の瓦が含まれる。また、上層と下層の境界付近では多量の14世紀代の土師器皿と瓦器を含んでいた。埋土中からは、弥生土器、古墳時代の土師器、８～９世紀の土器、土製品、10～11世紀代の土器が遺物整理箱４箱と12～14世紀の土器が遺物整理箱26箱の他、奈良時代及び平安時代以降の軒瓦、丸平瓦、熨斗瓦、雁振瓦、鬼瓦、磚が合計遺物整理箱40箱、他に鉄製刀子・釘・鎌、鉄滓、滑石製石鍋、砥石、サヌカイト剥片、建築部材と考えられる凝灰岩、炭化物、動物の骨が少量出土している。ＳＤ547よりも瓦の出土量が占める割合は多い。重複関係からＳＤ551より古くＳＤ546・547よりも新しい。なお、これらの溝の埋没時期を示す出土遺物の時期差があまりないことから、短い時間幅の間で溝の掘削と埋め立てを繰り返していたことが考えられる。ＳＸ549・550はいずれも柱間0.63～0.75mの１×１間の掘立柱列で、ＳＤ547の溝底で検出した。位置的に、ＳＤ546もしくは547に伴う板と杭を用いた簡易な橋のような構築物であった可能性が考えられる。埋土中からは８～９世紀の土師器、黒色土器Ａ類、須恵器、12～13世紀の土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、平安時代以降の丸瓦、時期不明の瓦、磚が少量出土した。ＳＤ551は幅1.7m、検出面からの深さ0.9m、東西方向の二段掘りの素掘りの溝で、埋土から８～９世紀の土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、土馬、12～14世紀の土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、輸入陶磁器、16世紀末から17世紀初頭の土器、国産陶器が合わせて遺物整理箱１箱、古代～中世の軒瓦、丸平瓦、熨斗瓦が合計遺物整理箱２箱出土

した。なお、北隣の調査（市TI第28次調査）でも、16世紀末から17世紀初頭頃の溝と土坑を検出している。

（久保清子）

Ⅲ　出土遺物

弥生土器、古墳時代の土器、８～９世紀代の土器、土製品、10～11世紀代の土器、12～14世紀の土器、16～17世紀代の土器が合計遺物整理箱71箱、奈良時代及び平安時代以降の瓦磚類が遺物整理箱78箱、銭貨５点、金属製品、鋳造関連遺物が遺物整理箱５箱、石器、石製品が遺物整理箱１箱、合計遺物整理箱155箱分ある。大半がＳＤ547とＳＤ548からの出土遺物であり、このうち瓦類と土器類について概要を記す。

瓦磚　出土瓦類には、奈良時代の丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、磚及び、平安時代以降の丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦がある。以下、ＳＤ547・548出土の軒瓦を中心に述べる。ＳＤ547出土の軒丸瓦は平安時代以降のものが２点あり、その内訳は、伝平松廃寺出土品と同笵[3]と思われる複弁８弁蓮華紋が１点、間弁がない16弁蓮華紋で素紋縁のものが１点である。軒平瓦は15点あり、その内訳は、奈良時代の軒平瓦は6682型式Ａ種、6710型式Ｃ種、6711型式Ａｂ種、6721型式種別不明が各１点、型式不明が２点の計６点である。平安時代以降のものは偏行唐草紋が１点、それとは異笵の唐草紋が１点の計２点である。中世以降のものは、唐草紋が１点、凹型形成台の圧痕がある中世Ⅱ期[4]の均整唐草紋が１点、瓦当貼り付け技法（中世Ⅲ～Ⅶ期[5]）の幾何学紋が５点の計７点である。ＳＤ548出土の軒丸瓦は９点あり、そのうち奈良時代のものは6301型式種別不明、6348型式Ａａ種、型式不明が各１点の計３点である。平安時代以降のものは６点あり、その内訳は、薬師寺72型式[5]と同紋の単弁蓮華紋が１点、雄蕊帯をもつ複弁蓮華紋が１点、薬師寺84型式・西大寺82型式Ａ種[6]と同笵の素紋縁単弁16弁蓮華紋が２点、ＳＤ547出土の16弁蓮華紋軒丸瓦と同笵が２点である。軒平瓦は28点あり、そのうち飛鳥～奈良時代の重弧紋軒平瓦が１点、奈良時代のものは、6712型式Ａ種、型式不明が各２点の計４点である。平安時代以降のものは14点で、その内訳は、薬師寺322型式・西大寺308型式Ａ種と同笵の素紋縁均整唐草紋が13点、西大寺394型式Ａ種と同笵の連巴紋が１点である。中世以降のものは９点で、その内訳は、均整唐草紋が４点、それとは異笵の均整唐草紋２点、ＳＤ547出土の中世Ⅱ期[4]の均整唐草紋と同笵が１点、中世Ⅲ～Ⅶ期[4]の幾何学紋と同笵が２点ある。またＳＤ548から出土した中世丸瓦のうち、玉縁凸面に「×」の線刻のあるものが９点ある。うち１点は吊り紐痕があり、他は残り具合が悪く吊り紐の痕の有無は不明であるが、すべての胎土・技法が似る。他に、ＳＤ031から奈良時代の軒丸瓦6133型式Ａ種１点、遺物包含層から奈良時代の軒平瓦6712型式Ｂ種が１点出土している。　（山前智敬）

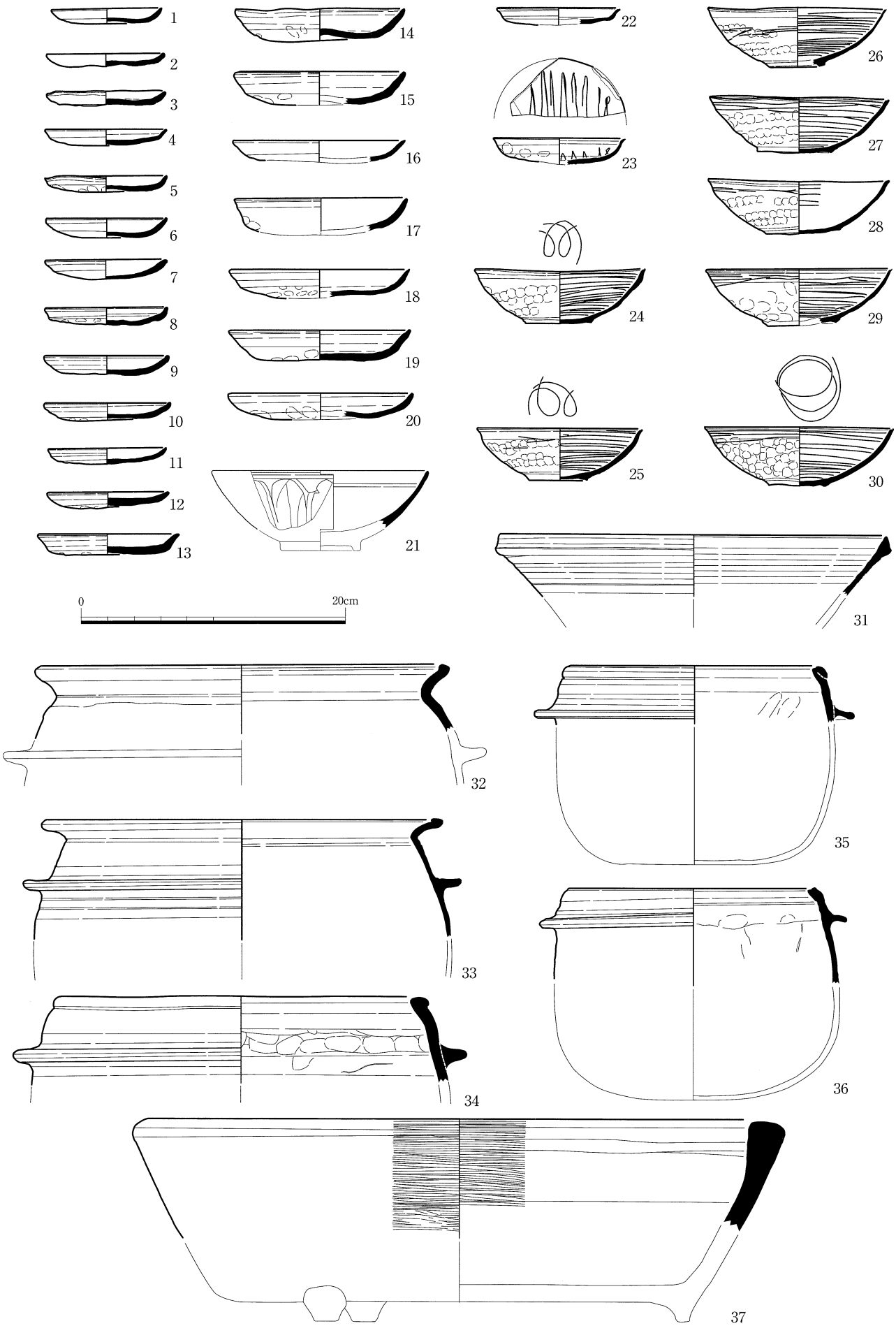
土器　ＳＤ547・548出土土器は、少量の弥生土器と古墳時代の土器の他は、古代と中世の土器に大別できる。以下、各遺構ごとに概要を記す。

ＳＤ547出土土器　奈良・平安時代、鎌倉時代後半のものがある。出土量は、奈良～平安時代後半のものが遺物整理箱10箱分であるのに対し、鎌倉時代後半のものは22箱分と多い。その割合は概ね古代１：中世２である。時期ごとの土器の内訳は、奈良時代は土師器杯・皿・高杯・甕・甑・竈、須恵器杯・杯蓋・皿・甕・鉢・壷の他、奈良三彩小壷、円面硯、製塩土器、土馬である。平安時代になると、これらの他に、黒色土器Ａ類椀・甕、緑釉陶器、灰釉陶器椀、輸入白磁椀が加わる。これらの出土量の割合は、奈良時代から平安時代前半のものが大半で、平安時代後半のものは少ない。出土量の大半を占める鎌倉時代後半の土器は、土師器皿が主体をなしており、口径８～10cm台の土師器小皿（１～13）及び口径12～14cm台の大皿（14～20）がある。この他、土師器羽釜（32～36）、瓦器皿（22・23）、椀（24～30）、瓦質土器盤（37）、東播系の須恵器鉢（31）・甕、焼締陶器、龍泉窯系青磁椀（21）、白磁・青磁椀、皿、青白磁合子蓋がある。これらはほとんどが破片の状態で出土したが、器表面の残存状態が良好なものが多く見受けられる。

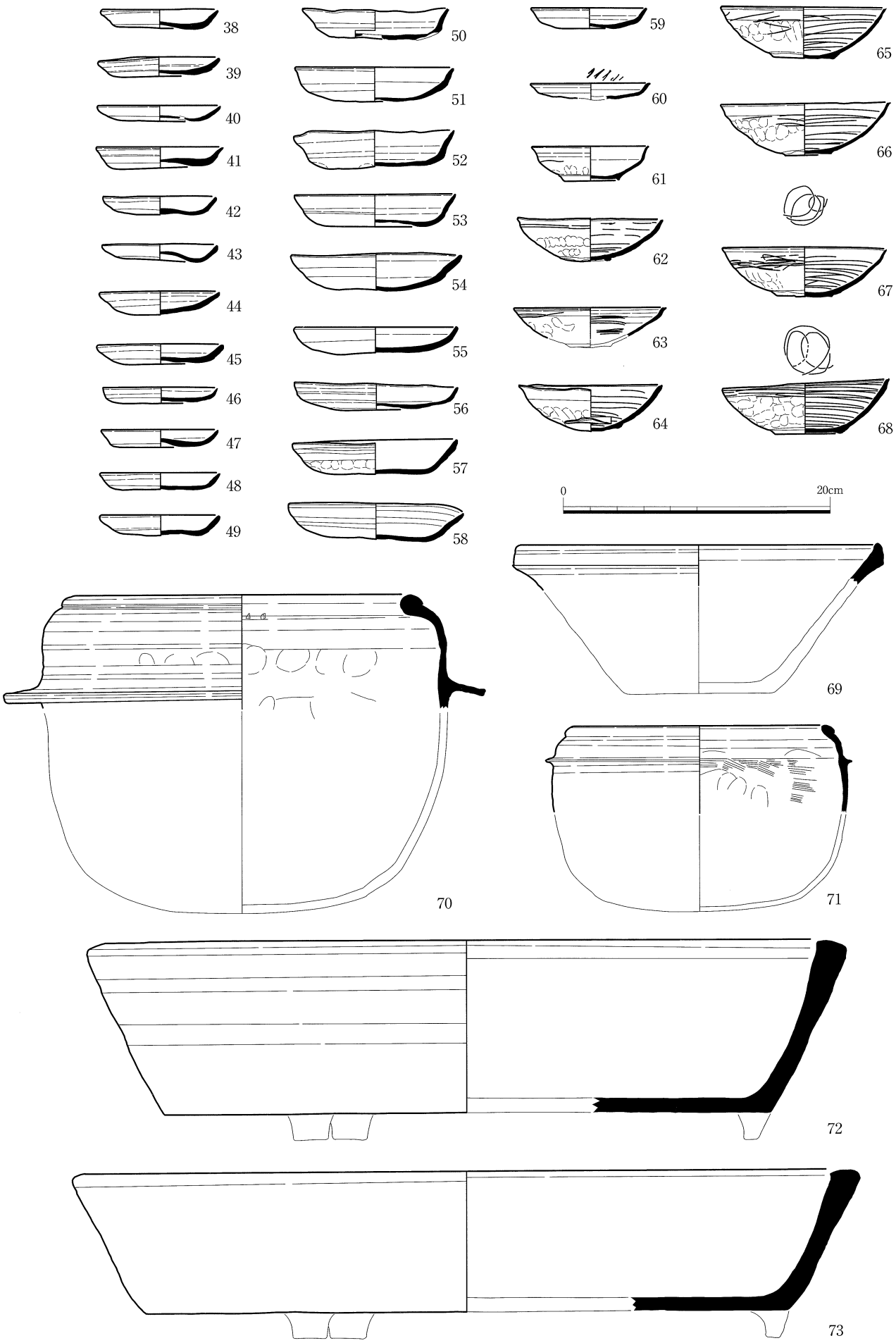
ＳＤ548出土土器　奈良・平安時代、鎌倉時代末から室町時代前期頃のものがある。出土量は、奈良～平安時代後半のものが遺物整理箱４箱分で、鎌倉時代末から室町時代前期頃のものは遺物整理箱26箱分とその大半を占めており、その割合は概ね古代１：中世４である。奈良～平安時代後半の土器は、ＳＤ547とほぼ同じ種類のもので占められている。鎌倉時代末から室町時代前期頃の土器についても同様で、土師器皿が主体であり、口径８～９cm台の小皿（38～49）、口径10～13cm台の大皿（50～58）の他、土師器羽釜（70～71）、瓦器皿（59・60）、椀（61～68）、瓦質土器火鉢（72～73）、東播系の須恵器鉢（69）・甕、焼締陶器甕、白磁・青磁椀・皿、青白磁小壷がある。これらは大半が破片の状態で出土したが、器表面の残存状態が良好なものが多く見受けられる。

この両溝から出土した土器を比較すると、各土器・陶磁器は共に調整手法や形態的特徴は非常に近似しつつも、型式差を読みとることができる。

土師器皿ではＳＤ547出土のものに比べて、ＳＤ548から出土するものが、器壁の薄手化、法量の縮小傾向及び



SD547出土土器　1/4



SD548出土土器　1/4

底部から口縁部のたちあがりがやや外反的になるなど、その形態変化を明瞭に認めることができる。土師器羽釜では、両溝ともに奈良県内の中世の遺跡で出土するものとしては一般的に見られる４種類の口縁形態のものが出土しており、ＳＤ548出土のものは口縁端部がより肥厚化するなど発達したものとなっている。瓦器椀では、土師器皿同様にＳＤ548出土のものは法量が縮小しており、ヘラミガキの間隔がより粗くなったものが主体となっており、高台の簡素化が見られる。ＳＤ548出土の瓦質土器盤、火鉢類は、口縁端部の形状などを含めて、いわゆる「奈良火鉢」としてほぼ定型化したものが主体となっている。以上の点から、ＳＤ547とＳＤ548から出土した土器群の間には型式変化を読みとることができ、ほぼ隣接する関係で前後に位置づけられるものと考える。

なお、この時期における各土器の種類ごとにその出土量を比較すると、両溝とも主体を占めるものは、土師器皿であり、次に瓦器椀と続く。量的には土師器皿・瓦器が出土土器の７～８割を占めている。

また、両溝に共通する点としては、土師器皿の中に、灯明皿として使用されていたものや底部に穿孔があるものが少量含まれている。さらに、土師器羽釜で体部から底部外面にかけて煤が厚く付着しているものや須恵器鉢で内面下半に摺り減り痕跡といった使用痕跡が認められるものが多く含まれることからが挙げられる。このことから、これらの土器は、当地域で生活していた人々の日常雑器であったことが窺える。

両溝のそれぞれの土器群の年代は、奈良市域における中世土器類の既編年等を手掛りにして考察すると、ＳＤ547出土土器群については鎌倉時代後半代（13世紀後半から14世紀初頭）、ＳＤ548出土土器群については鎌倉時代末期から室町時代前期頃（14世紀代）に位置づけられる。

Ⅳ　まとめ

①調査地一帯は、弥生～古墳時代の遺物が出土することから、平城京遷都以前から人々が生活していたことが考えられる。平城京遷都後の奈良～平安時代前半は建物が多く建てられ、その当時の生活ぶりを窺わせる遺物も多く出土している。ところが、平安時代後半は遺構や遺物の数が一気に減少する。その後鎌倉時代に入ると再びこの地に建物が建てられるようになる。この頃、東三坊坊間路の路面上に溝が掘られていることから、坊間路は既に廃絶していたか、当初よりも幅員を縮小して踏襲していたことが考えられる。

②八条大路は、これまでにその想定地点の数箇所において調査が行われているものの、大路に関する遺構は見つかっていないため、大路の規模や位置については明らかになっていない。そこで、周辺調査で得られた条坊遺構の成果[7]を基に東三坊坊間路と八条大路交差点の座標値を計算すると、Ｘ＝－149,202.6m、Ｙ＝－17,238.3m付近、つまり調査地に南接する現県道下に位置することになる。このため八条大路北側溝が坊間路を横断していた場合、今回の発掘区南端を通ることが考えられた。しかし、奈良時代の遺構面が削平されていたために交差点に関する成果を得ることができなかった。

③鎌倉時代の溝とその出土遺物から多くの情報を得ることができた。溝内から大量の中世瓦が出土していることから、付近には瓦葺きの建物があり、この建物の廃絶と溝の埋没時期との関連性が窺える。また、溝内の出土遺物からは土師器や瓦器といったごく一般的に普及している土器以外に輸入陶磁器や石鍋も使用されていることがわかった。他にも注目すべきこととして、溝から使用痕があまり見られない大量の土師器皿と瓦器椀が出土したことが挙げられる。これらの土器の出土状態から、複数回にわたって一括投棄が行われていたことがわかる。溝内に土器を一括投棄する例は県内の複数の中世集落遺跡[8]でも見つかっており、この時期には一般的に行われていたことが考えられる。土器の一括投棄が行われた理由は、単純な廃棄行為の他に、神事に伴う饗宴等で使用したものを一度きりの使用で廃棄するなど祭祀に伴う行為[9]であることも想定しておくべきであろう。

④室町時代に入っても引き続き、建物は建てられているが、室町時代末頃以降は宅地から耕作地へと、土地利用の転換が行われたことが考えられる。　（久保清子）

1）奈良市教育委員会「平城京東市跡推定地（左京八条三坊十二坪）の調査第27・28次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成13年度』2004

2）奈良県立橿原考古学研究所「左京八条三条五坪（東市推定地）の調査」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1999年度』2000

3）伏見町史刊行委員会『伏見町史』1981　P.469　図９-５

4）山崎信二『中世瓦の研究』（奈良国立文化財研究所学報第59冊　2000）

5）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987

6）奈良国立文化財研究所『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990

7）奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査Ⅰ～ⅩⅥ』1989～1998・「平城京東市跡推定地の調査　第24・25次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成11年度』2001で報告されているデーターをもとに計算した。

8）奈良県立橿原考古学研究所『十六面・薬王寺遺跡発掘調査報告書』1988・「大和中央道関連遺跡（田中・垣内遺跡）の調査」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）1989年度』1990・『中世びとのくらしと喜怒哀楽』1994・『小泉堂遺跡発掘調査報告書』2005等多数報告されている

9）山川　均「土器をまとめてすてること」『文化財学論集』1994

平城京東市跡推定地の調査　第32次

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の市場のひとつである東市跡推定地内にあたる。東市は、平城京左京八条三坊五・六・十一・十二坪の四坪分を占めていたと考えられている。

今回の調査地は、このうちの六坪の南辺中央部付近にあたり、五・六坪の坪境小路が想定されているところである。六坪は、これまでに31次にわたって調査が行われており、奈良時代の道路、築地の雨落ち溝、建物、井戸、土坑、平安時代の井戸、室町時代の建物の他に、奈良時代よりも古い河川を検出するなど数多くの遺構が検出されている。

今回は従来の調査成果を踏まえて、東西約18m、南北約17m（面積約300㎡）の発掘区を設定して行った。

Ⅱ　検出遺構

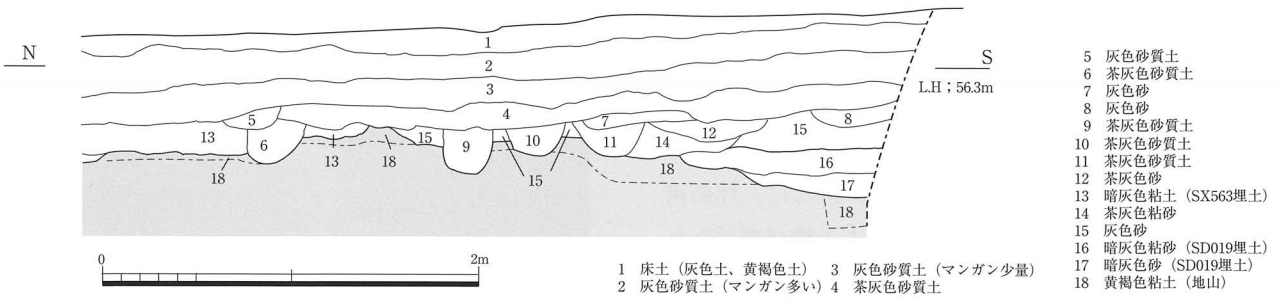
堆積土層　発掘区内の基本的な層序は、耕土・床土（0.3m）の下に、灰色砂質土（マンガン多く含む・0.2m）、灰色砂質土（0.2m）と続き、表土下約0.7mで奈良時代の遺構面である淡茶褐色砂質土（0.1m）に至る。しかし、発掘区南半ではこの淡茶褐色砂質土は見られず、灰色砂質土の直ぐしたが黄褐色粘土の地山である。

遺構は、地山及び淡茶褐色砂質土上面（標高：55.9m）で検出した。検出した遺構には、五・六坪の坪境小路北側溝（SD019）、雨落ち溝（SD552）、掘立柱建物（SB554～556）、掘立柱列（SA557～560）、素掘り溝（SD553）、土坑、不明遺構（SX561～563）がある。この他に、奈良時代よりも古い流路も確認している。

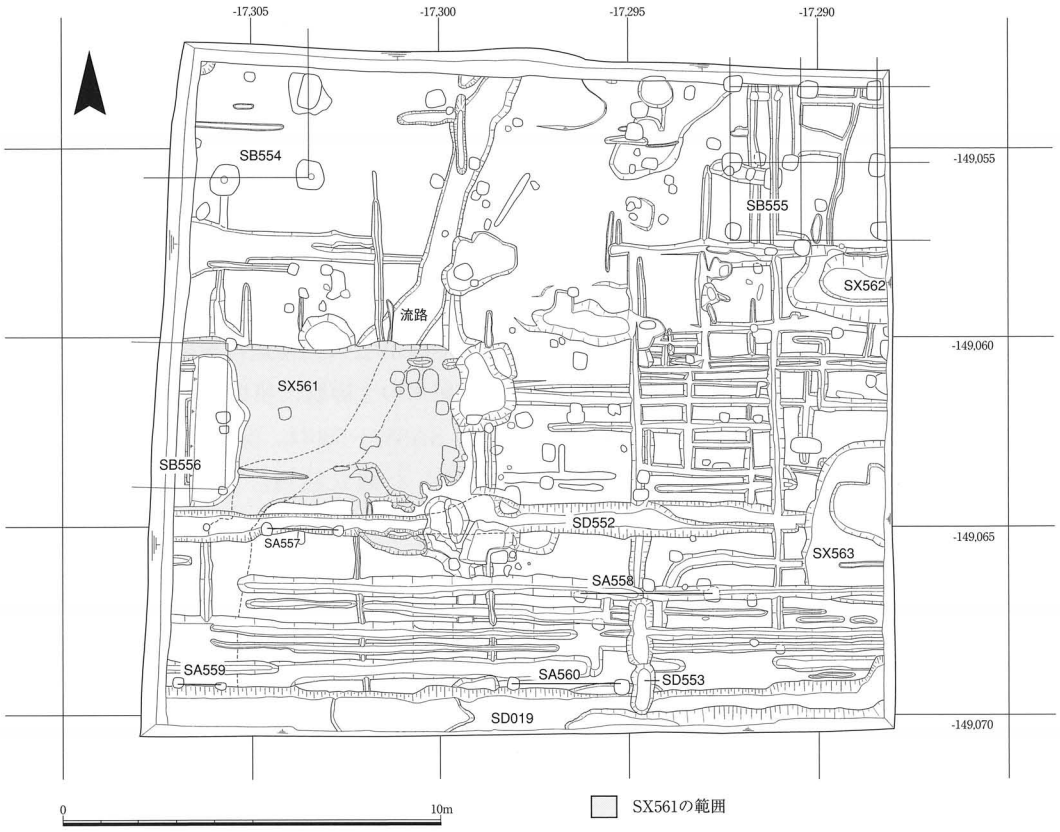
以下、主な遺構を時代順に説明する。

奈良時代の遺構　SD019は、五・六坪の坪境北側溝で、長さ18m分を検出した。南肩は発掘区外に及ぶため、溝幅は不明である。検出面からの深さは、0.3m。溝内には、8世紀末から10世紀初頭の土器・瓦を包含する暗灰色粘土、暗灰色砂が堆積する。溝最深部の国土座標はX－149,070.400、Y－17,209.000（発掘区東端）、X－149,070.500、Y－17,306.000（発掘区西端）である。SD552は、築地雨落ち溝で、長さ18m分を検出した。SD019の最深部とSD552心の距離は約4.9mを測る。SD553は、SD019とSD552の間で検出した南北方向の素掘り溝で、南北3.0m、溝幅0.6mある。検出面からの深さは、北端は0.2m、南端では0.3m。想定される築地の下を通る暗渠と考えられる。SD019とは同時期に構築されている。溝内埋土から、8世紀末の土師器、須恵器が遺物整理箱で約1箱分出土した。SA557～560は、発掘区の南半部の４箇所でそれぞれ検出した掘立柱列。SA557はSD552よりも新しい。SA559・560は、SD019と同時期に構築されている。SA559は六坪のほぼ中心（X－149,070.000、Y－17,306.700）に位置しており、橋脚になる可能性がある。さらに、SA559の北3.9mのところに柱穴を検出（SD552の溝底で検出）しており、この柱穴も橋脚になる可能性がある。SX561は、SD019・552、SB556、SA559、流路と重複して検出した遺構。東西10m以上、南北5.0m。平面長方形状の掘形である。検出面からの深さは0.2m。遺構内には、8世紀中頃から末の土師器・須恵器の甕や食器類を包含する暗褐色粘質土が堆積していた。遺物整理箱で、約3箱分ある。重複関係から、SD019・552、SB556よりも古く、流路よりは新しいことがわかる。土採りを目的とした坑かもしれない。SX562は、SB554と重複して検出した遺構。東西2.5m以上、南北1.6m、平面長方形状の掘形を呈する。深さは0.5mある。遺構内には、奈良時代の土器・瓦を包含する褐色系の砂を含んだ灰色粘土が堆積する。遺物の出土量は、遺物整理箱で1箱にも満たない。どのような性格の遺構なのか明らかではない。重複関係から、SB554よりも古い。

平安時代の遺構　SB554は、雨落ち溝SD552の溝心から北へ約9.0mの位置で検出した発掘区北西隅で検出した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物。東側柱の南から2番目の柱穴だけ柱の抜き取り穴がある。抜き取り穴



第32次調査　検出遺構平面図　1/200



第32次調査　遺構平面図　1/200

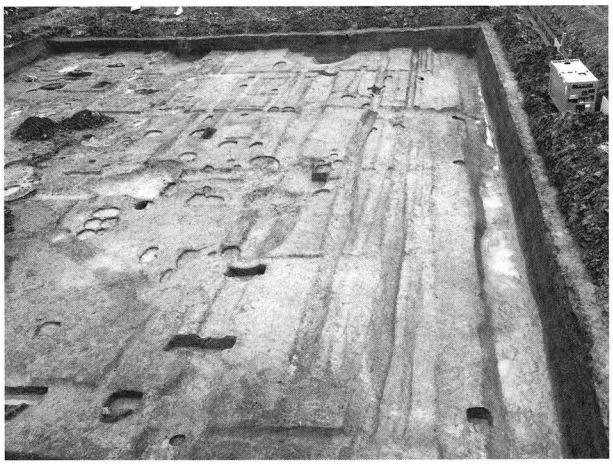
からは、8世紀の土師器・須恵器・瓦の他に、9世紀前半の土器が遺物整理箱約1箱分出土した。SB555は、SD552溝心から約7.2m北で検出した東西2間以上、南北2間以上の総柱建物。柱穴の深さは、いずれも検出面から0.2mと浅い。柱穴からは8世紀代の土師器破片とともに9世紀前半頃の土師器杯・皿の破片が少量出土した。

鎌倉時代の遺構　SB556は、後述するSX562と重複して検出した東西1間以上、南北2間の東西棟の掘立柱建物。柱掘形が一辺0.2mと小さい。出土遺物がないので詳細な時期は不明であるが、SX563との重複関係から、鎌倉時代以降の建物であることがわかる。SX563は、SX562の南側で検出した遺構。東西2.0m以上、南北4.0mの平面方形状の掘形を呈する。検出面からの深さは0.3m。遺構内には、奈良時代の土器・瓦、鎌倉時代の瓦器を包含する暗茶褐色系の砂を含んだ灰色粘土が堆積する。この遺構についても性格は不明。

Ⅲ　まとめ

六坪南辺中央部付近は、坪境小路と築地雨落ち溝は構築されているものの、奈良時代を通じて建物は築地塀の際までは建てられていないことが判明。さらに、坪の南辺中央には、小路への出入りができるよう橋が架けられていた可能性が考えられるようになった。平安時代になっても、雨落ち溝から北へ24～30尺程度の空閑地を設け建物を建てていたことも窺える。　（三好美穂）

第32次調査　発掘区全景（南西から）



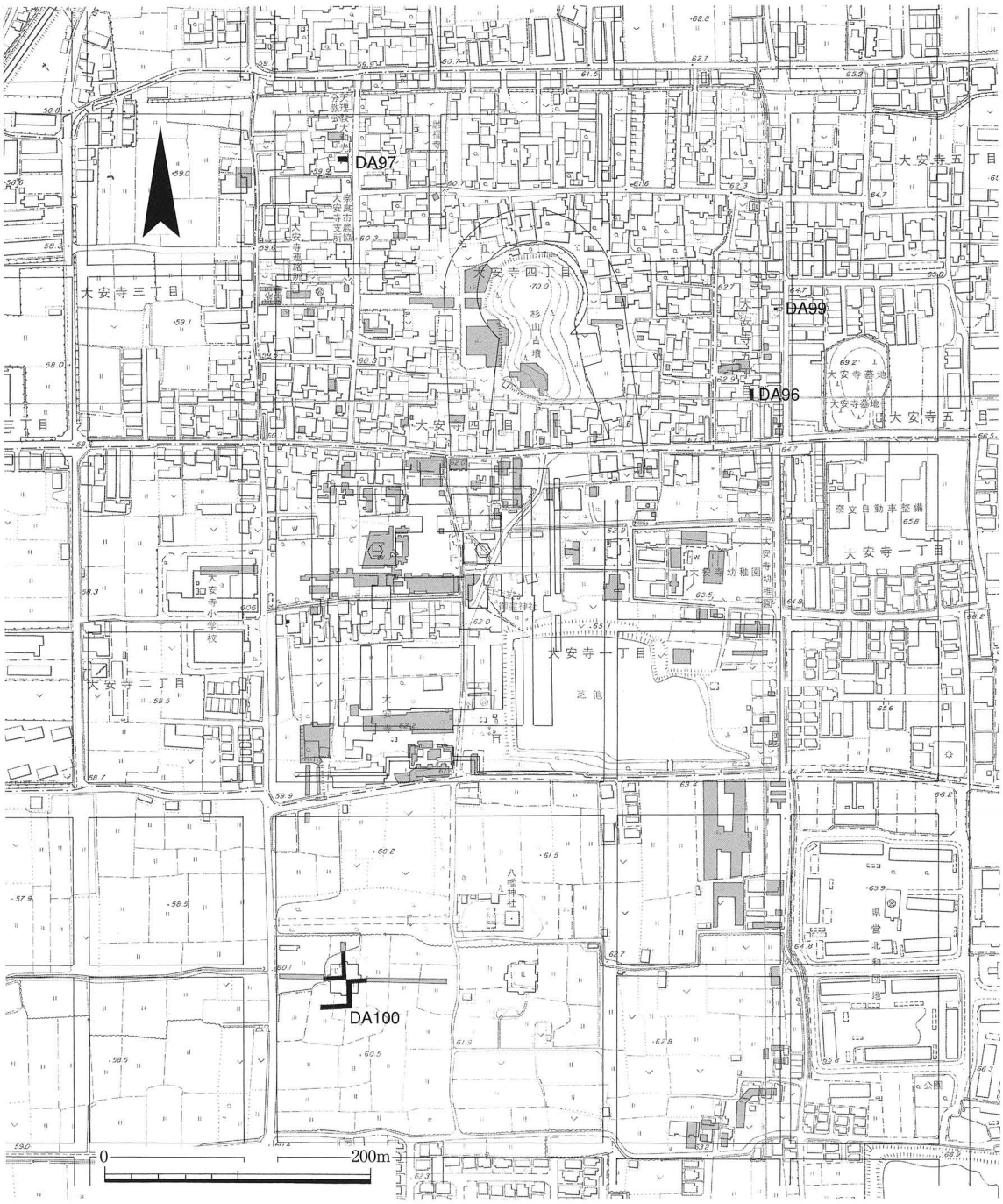
発掘区南半部（西から）

15. 史跡大安寺旧境内の調査　第96次～第100次

平成14年度には第96次から第100次までの5件の発掘調査を実施した。このうち個人住宅に係る申請が3件、宗教施設の庫裡が1件で、いずれも発掘調査が条件で許可になったものである。

第100次調査は、西塔の保存整備事業に係る発掘調査である。

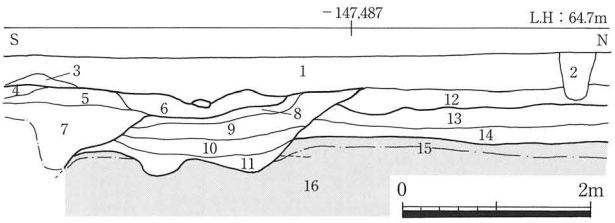
調査次数	申請者名	事業名 or 工事内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
96	個人	個人住宅改築	大安寺五丁目 991、992	H 14.4.15 ～ 4.19	14 ㎡	山前
97	天理教大和光分教会	庫裡増築	大安寺四丁目 1036-1	H 14.6.18 ～ 6.27	40 ㎡	武田
98	個人	個人住宅改築	大安寺二丁目 1317	H 14.10.22 ～ 10.29	9 ㎡	山前
99	個人	個人住宅改築	大安寺五丁目 967-15	H 14.12.3 ～ 12.6	7 ㎡	三好
100		史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1320-2 他	H 14.11.18 ～ H 15.3.3	270 ㎡	松浦



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図　1/5,000

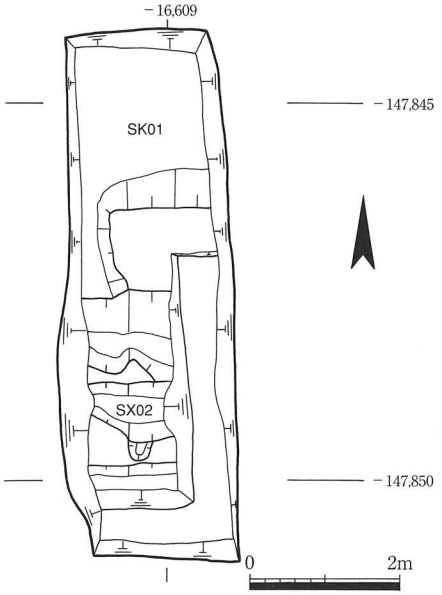
史跡大安寺旧境内（賤院推定地）の調査　第96次

第96次調査　発掘区全景（北東から）



1　表土
2　灰色砂礫
3　灰色土
4　黄茶色砂礫
5　淡灰色砂質土
6　灰色粘砂
7　濁灰色砂質土
8　栗灰色年度
9　灰色粘質土
10　灰色粘質砂
11　灰色砂
12　茶褐色粘質土
13　灰色粘土
14　茶灰色粘土
15　灰色砂質土（地山）
16　淡青灰黄色粘土（地山）
4～7はSX02新埋土　8～11はSX02古埋土

第96次調査　発掘区西壁土層図　1/80



第96次調査　遺構平面図　1/100

調査地は、史跡大安寺旧境内の東端部分、大安寺の伽藍復原によると賤院推定地にあたる。調査地の北西約25m地点で実施した市ＤＡ第22次調査（昭和60年度）では、奈良時代中頃の井戸１基、近世の土坑、近現代の井戸、土坑を検出している。奈良時代の井戸枠内からは、「大二三井」と墨書や線刻された土師器が出土している。南東約40m地点で実施した市ＤＡ第25次調査（昭和61年度）では江戸時代の土坑を検出しているが、奈良時代の遺構はなかった。南東約25m地点で実施した市ＤＡ第40次調査（平成元年度）では大安寺旧境内の東限を画す左京六条四坊十坪と十五坪の坪境小路西側溝および江戸時代の土坑を検出している。今回、奈良時代の遺構の残存状況を把握することを主目的として調査を行なった。

発掘区内の基本的な層序は、上から表土（茶褐色土）、茶褐色粘質土と続き、現地表下約0.6mで灰色砂質土の地山に至る。遺構検出は地山上面で行なった。地山上面の標高は概ね63.9ｍである。検出した遺構には、時期不明の土坑、19世紀中頃の溝状遺構がある。以下で概要を述べる。

ＳＫ01は発掘区の北側で検出した土坑。東西1.7m以上、南北3.3m以上、深さ約0.4mである。埋土から時期不明の土師器が出土した。埋没の時期については不明であるが、重複関係から後述のＳＸ02よりも古い。

ＳＸ02は発掘区の南側で検出した溝状遺構。埋土は大きく２層に分かれるが、出土遺物の時期差はないのでほぼ同時期に埋まったものと思われる。いずれも茶褐色粘質土上面から掘り込まれている。東西1.7m以上、南北3.5m以上、深さ約0.9mである。埋土から奈良時代の須恵器、土師器、平瓦、中世の丸瓦、平瓦、19世紀の信楽窯鍋・壷・椀・蓋、瓦質土器鉢・火舎、19世紀中頃の肥前系磁器椀、近世平瓦、桟瓦、道具瓦、時期不明の土師器、平瓦が出土した。重複関係からＳＫ01よりも新しい。

今回の調査で検出したＳＫ01は、出土した土器が小片のため、時期については不明である。溝状遺構のＳＸ02についてであるが、申請者によると、以前には発掘区の南側に沼地があり、それを埋め立てたという経緯があったようである。今回の発掘区で検出したＳＸ02が池の一部に該当する可能性もあろう。

また、今回の調査でも、奈良時代の遺構は確認できなかった。しかしながら、19世紀以降につくられたＳＸ02から奈良時代の遺物が出土していることから考えて、奈良時代の遺構は後世の遺構により削平されているものと思われる。　（山前智敬）

史跡大安寺旧境内（食堂并大衆院推定地）の調査　第97次

調査地は、大安寺旧境内の伽藍復原では、主要伽藍の北方に位置し、食堂并大衆院推定地の北西隅付近に該当している。調査地の北隣で実施した市大安寺第21次調査（昭和60年度）では、近世の遺構を多く検出しているが、奈良時代の遺構は確認していない。

今回の調査は、調査地における奈良時代の遺構の様相の確認を主要な目的として、東西８ｍ、南北５ｍの発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から順に、造成土（0.1～0.2m）、暗褐色土（0.1～0.2m）、やや茶味がかる暗褐色土（約0.2m）と続き、現地表下0.6～0.9mで黄灰色シルトもしくは暗黄灰色粗砂の地山に至る。また、発掘区北西部分～中央部にかけては、地山上面に暗茶褐色砂質土（0.1～0.4m）の堆積がみられ、一部にこの層の上面から掘り込まれている遺構も確認した。なお、遺構検出作業は地山上面にて実施した。

発掘区内で検出した地山は、北西部分が最も低く標高約60.２ｍ、また最も高い東辺部付近では標高約60.５ｍであった。主な検出遺構としては、近世の土坑がある。以下に、検出した遺構の概略を記す。

ＳＫ01は、発掘区南東隅で検出した土坑である。発掘区内では東西約2.6m、南北約0.6m分を検出した。南端・東端は発掘区外へと続く。深さは約0.1mで、奈良～平安時代の丸・平瓦と16～17世紀頃の土師器羽釜が出土している。

ＳＫ02は、発掘区中央やや西寄りで検出した土坑である。長辺約0.6m、短辺約0.2m、深さ約0.15mで、埋土からは奈良時代の軒丸瓦が１点出土した。

ＳＫ03は、発掘区中央やや東端で検出した土坑である。平面不整形で、東西約1.6m、南北約1.0m、深さ0.15mを測る。埋土から奈良～平安時代の瓦と17世紀の陶磁器片が出土した。

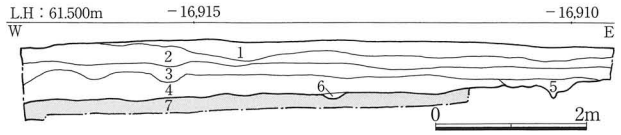
ＳＫ04は、発掘区の南辺ほぼ中央で検出した埋甕土坑である。遺構の重複関係から見て、後述のＳＫ05よりも新しい。掘形は平面ほぼ円形で、径約0.7m、深さ約0.3mである。掘形底部には江戸時代前半の瓦質土器甕が据えられていた。

ＳＫ05は、発掘区の南辺中央やや西寄りで検出した土坑である。平面隅丸方形を呈し、長辺約1.4m、短辺約1.0m、深さ約0.55mである。埋土から奈良～平安時代の瓦と17世紀頃の陶磁器が出土した。

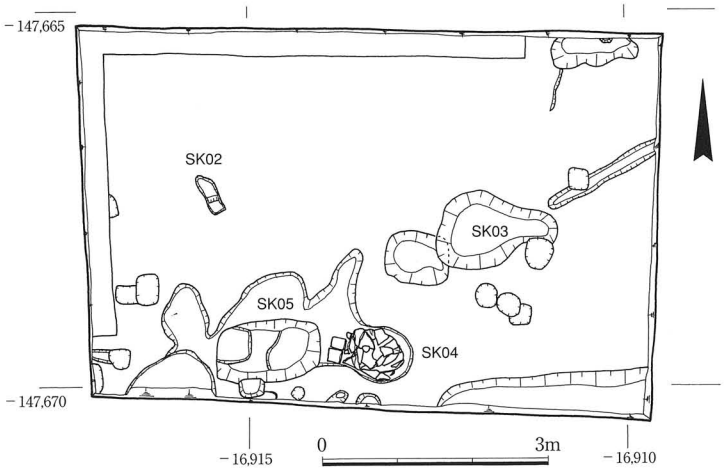
遺物は、遺物整理箱で６箱分が出土した。奈良～平安時代の丸・平瓦や土器の破片が大半を占め、次いで近世の陶磁器片が多い。奈良時代の軒丸瓦は１点が出土しただけである。

今回の調査で検出した遺構は、出土遺物の年代からみて、ほとんどが近世以降の時期の遺構と考えられる。明確に奈良時代と確認できる遺構や、大安寺に直接関連があると推定される遺構等は検出できなかった。

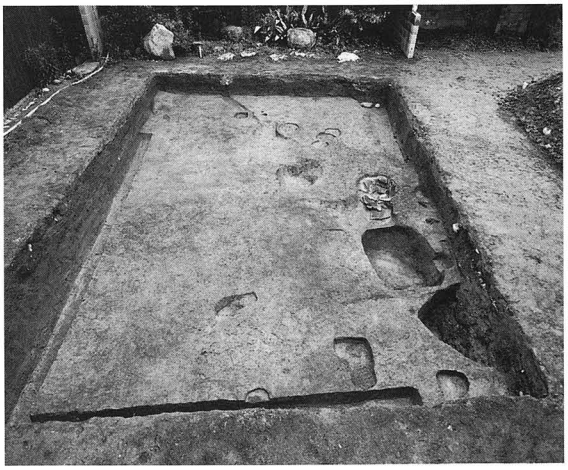
（武田和哉）



1　造成土
2　黒褐色土
3　黒褐色土（やや茶味がかる）
4　暗茶褐色砂質土
5　黒褐色粘土（土坑埋土）
6　暗褐色土
7　黄灰色シルトもしくは暗黄灰色粗砂（地山）

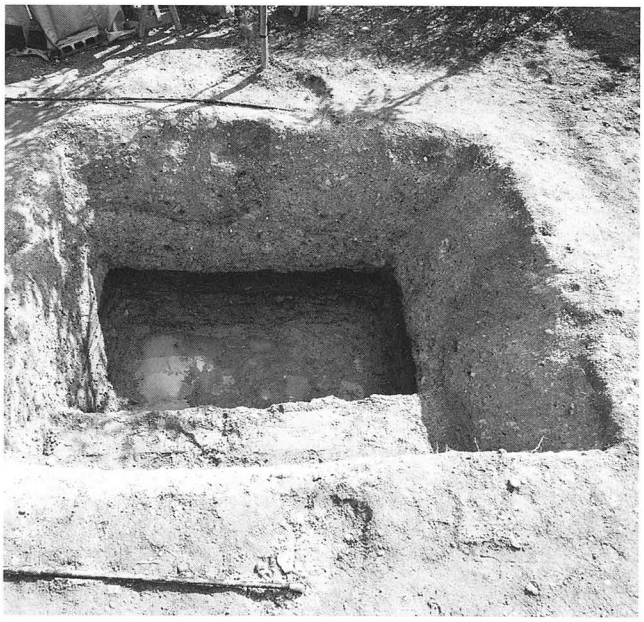


第97次調査　遺構平面図　1／100

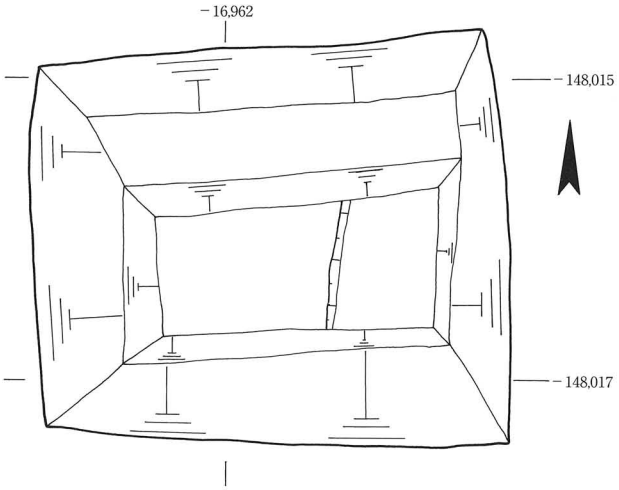


第97次調査　発掘区全景（西から）

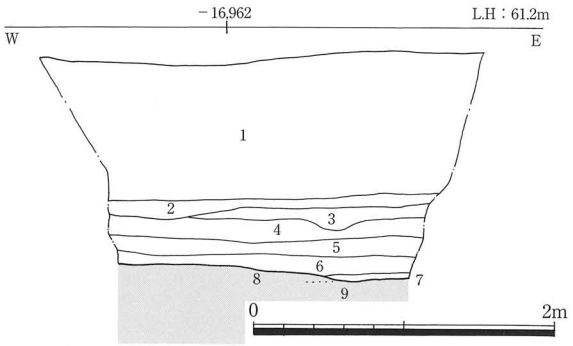
史跡大安寺旧境内（西面築地塀推定地）の調査　第98次



第98次調査　発掘区全景（北から）



第98次調査　遺構平面図　1/50



1　造成土　　4　淡灰色砂質土　　7　灰色砂質土
2　黒灰色土　　5　淡灰色粘質土（瓦多く含む）　　8　黄灰色粘土（地山）
3　暗灰色土　　6　灰色粘土＋濁黄灰色粘土　　9　灰色砂礫（地山）

第98次調査　発掘区北壁土層図　1/50

調査地は、大安寺の伽藍復原では、伽藍西側の築地塀の想定地にあたる。すぐ西側には東三坊大路および同東側溝が想定される場所でもある。調査地のすぐ北側で実施した市ＤＡ第68次調査（平成７年度）では、地山面が東から西に向かって下り勾配であること、各堆積土は粗く、版築の痕跡はみられないこと、堆積土層のうちには遺構面となるものが何面かあることを確認しているが、東三坊大路および同東側溝、築地塀および同雨落溝にあたる遺構は確認していない。また、調査地の西約25mで実施した市ＤＡ第82次調査（平成10年度）では、地山上面から掘り込まれる時期不明の土坑、近世の土坑・溝を検出している。地山上面のほかに遺構面がもう一面あり、この遺構面の形成が早くても奈良時代後半以降であることを指摘している。今回の調査では、条坊遺構の確認および伽藍に関する遺構の確認を主目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成土、黒灰色土、暗灰色土、淡灰色砂質土、淡灰色粘質土、灰色粘土（濁黄灰色粘土混）、灰色砂質土と続き、現地表下1.3～1.5mで黄灰色粘土または灰色砂礫の地山に至る。遺構検出は淡灰色粘質土上面（標高：約59.８m）、地山上面（標高：約59.５m）で行った。淡灰色粘質土上面および地山上面ともに顕著な遺構はなかった。

遺物は整理箱で４箱分が出土した。淡灰色粘質土から奈良時代の須恵器壷２点、丸瓦122点（12.13kg）、平瓦235点（33.77kg）、中世の平瓦１点（0.49kg）、中世と思われる土師器皿１点、時期不明の土師器甕１点、黒色土器または土師器甕の体部１点、丸瓦か平瓦いずれか不明なもの22点（0.49kg）が、灰色砂質土から奈良時代の平瓦７点（0.51kg）、丸瓦か平瓦いずれか不明なもの５点（0.12kg）が出土した。

市ＤＡ第68次調査区で確認している遺構面の標高は約59.9mである。この遺構面の標高と、今回検出した淡灰色粘質土上面の標高とはほぼ同じ高さである。一方、第68次調査区での地山は、東から西に向かっての下り勾配であるのに対して、今回の調査区内の地山は西から東へ向かって下る。このことから、淡灰色粘質土から下の堆積土は遺構の埋土となる可能性も考えられるが、発掘区が狭かったこともあり、詳細については明らかにすることはできなかった。

今回の調査でも条坊に関する遺構や、大安寺伽藍に関する遺構は確認できなかった。東三坊大路および同東側溝、伽藍西側の築地塀および同雨落溝は発掘区の西側にあるものと考えるのが妥当であろう。　　（山前智敬）

史跡大安寺旧境内（賤院推定地）の調査　第99次

本調査地は、大安寺の伽藍復元図によると、大安寺の北東部にある賤院内に推定されている。賤院推定地内では、これまでに13次にわたって発掘調査が実施されている。申請地のすぐ西側で行われた調査（市DA第85次・86次調査）では、室町時代の濠状遺構が南北方向に掘られていることがわかり、奈良時代だけでなく室町時代の遺構も良好な状態で残っていることが判明している。

今回の調査は、奈良時代の遺構及び室町時代の濠状遺構の一部を検出することを主目的として、敷地の南西隅に東西3.5m、南北2mの発掘区を設け実施した。

発掘区内の層序は、盛土（0.2～0.4m）の下に耕土（0.1～0.2m）、奈良時代～平安時代・江戸時代の土器片を包含する暗黄褐色土（0.1～0.2m）が堆積しており、表土下約0.5～0.7mで黄褐色粘土の地山に至る。遺構は地山上面（標高：約63.8m）で検出した。

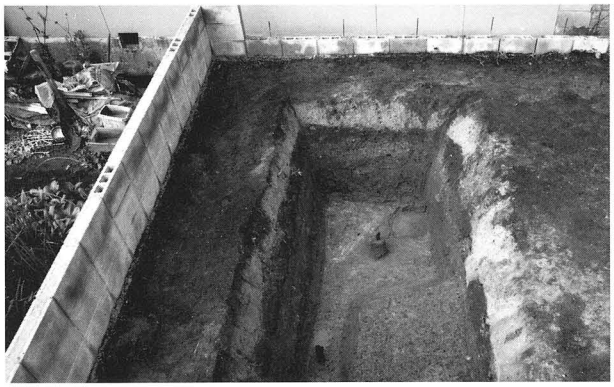
検出遺構　遺構には、溝1条、柱穴1、土坑1がある。

溝SD01は、北から東へL字状に曲がった溝で、南北の長さ0.8m、東西の長さ0.9mぶんを確認した。検出面からの深さは約0.6m、溝の北・南端及び西・南肩部は発掘区外に続くため、溝幅等は不明。溝内には、上・中・下3層が堆積する。上層は青灰色粘土、中層は暗灰色粘土、下層には暗灰色粗砂が堆積し、それぞれの層には17世紀代の土師器が包含されていた。堆積状態や出土遺物からみて、17世紀以降に一挙に埋められたことが理解できる。

柱穴は、SX02と重複して検出した。東西0.6m以上、南北0.5m以上の平面円形状の掘形を呈する。検出面から約0.1m掘り下げたところで、直径0.2mの柱痕跡を検出した。底部には瓦質土器鉢の破片が敷かれていた。礎板であろう。SX02よりも古い。SX02は、SD01・柱穴と重複して検出した溝状の土坑。西肩部を検出しただけなので、規模等については不明である。検出面からの深さは約0.1m。暗褐色土が堆積していた。

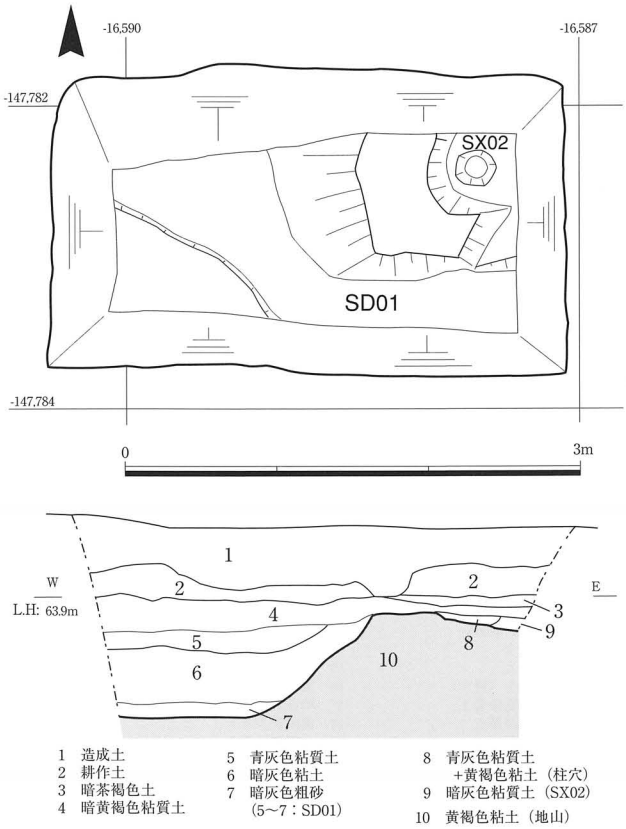
出土遺物　奈良時代の土師器・須恵器・瓦、平安時代・室町時代の土師器、江戸時代の土師器・陶磁器、瓦が出土整理箱で2箱分出土した。このうちの大半のものが、第4層の暗黄褐色粘質土からの出土である。

まとめ　今回の調査では、奈良時代の遺構を検出する事ができなかったが、後世の溝が良好な状態で残存していることが明らかになった。溝SD01及び市DA第85次・第86次調査で検出された濠状遺構との関係については、埋没した時期に差が認められるので、同一の遺構とは考えにくい。濠状遺構を掘り直した可能性は考えられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。今後の周辺調査例を待って再検討していきたい。（三好美穂）



第99次調査　発掘区全景（東から）

発掘区東半部（北から）



第99次調査　遺構平面図・北壁土層図　1/50

史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査　第100次

Ⅰ　はじめに

今回の調査は、昨年に引き続き塔院地区の保存整備事業の一環として実施したもので、本年度は西塔基壇の確認調査を行なった。現状の塔跡は、水田面との比高差が、東側で約0.6m、西側で約1.2mの段をなす小高い土壇となっており、中心部にむかってさらに約１m盛り上がっている。平面的には東西約33m、南北約35mの方形に近い形状であるが、北東部と南西部の角は水田によって削平された状態となっている。

発掘区は、土壇上に現存する心礎を中心として東西南北の中心軸を設定し、それに沿って十字状に幅３mのトレンチを設け、さらに土壇南部にも南側トレンチと接続して、幅３m、長さ24.5mの東西方向のトレンチを設定した。調査面積は計270㎡である。

Ⅱ　基本層序

土壇上の堆積土層は、心礎から東西にそれぞれ約７m、南北にそれぞれ約９mまでは0.2m前後の腐葉土等の表土で覆われており、その下がすぐに基壇の築成土となっている。しかしそこから外側にむかって築成土が削られており、四方で若干の違いはあるが、基壇周縁部は損壊している。

現土壇は後述するように本来の塔基壇より大きく、基壇外周には現土壇を形成している厚い堆積層がある。大半は塔廃絶後から近世にかけて基壇を削平して広げたものである。この外周の層序は、土壇上面から約0.6m下までは表土および近世の堆積層で、南側には近世に瓦がまとめて廃棄されて形成された層がある。その下は四方とも基本的に同じ層相で、上から、瓦を大量に含む暗赤色焼土層が0.2m前後、明黄灰色砂質土が0.1～0.2m、瓦を大量に含む黄色粘質土が0.1～0.2m、明茶灰色砂が0.05m前後堆積し、褐灰色シルトの硬い面に達する。この硬くしまったシルト層は遺物を包含しているが、この上面が基壇の基底面と考えられる。瓦を大量に含む層は、瓦がほとんど含まれない明黄灰色砂質土を挟んで上下２枚認められるが、上層の焼土層は後に外側にむかって引き伸ばされているようである。

各地点での標高は、心礎中心が61.88m、土壇上面61.2m前後、基壇築成土上面は61.0m前後、シルト層上面約59.7mである。

南側の東西トレンチは、約0.2mの耕土と0.1m前後の茶褐色土の下が橙色礫層の地山であり、地山の標高は59.7m前後で、基壇基底面とほぼ同じ高さである。

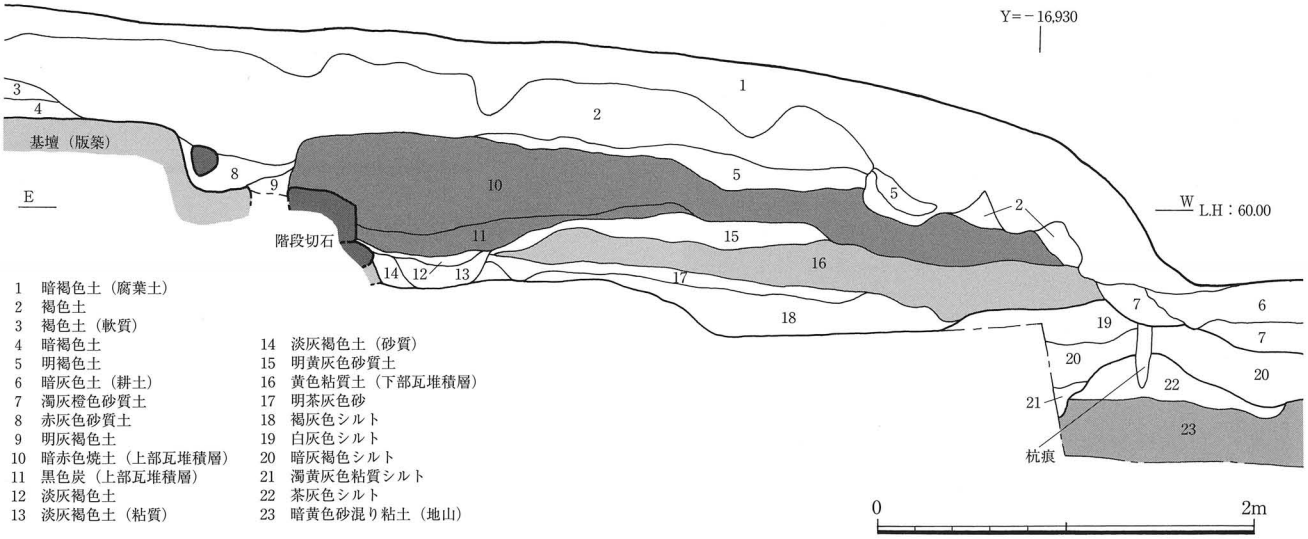
Ⅲ　検出遺構

検出した遺構は、塔基壇およびその上面に残る礎石抜き取り痕跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、柱穴がある。溝や土坑・柱穴については調査範囲が狭く詳細は不明であり、今後の調査で判断したい。

基壇

発掘区の東西南北四方向において、基壇に付く階段の張り出し部分を検出した。それぞれ階段の半分を検出したが、南は延石のみ、東は延石と地覆石の一部、北・西は延石と一段目の踏み石と地覆石の一部が残存していた（遺構図アミかけ部）。階段の出は約1.5m（５尺）、幅は各約2.4m検出したのでおそらく全体幅は約4.8m（16尺）と考えられる。踏み石の端には登葛石を嵌め込む加工がなされている。

階段付け根から延びる基壇辺の延石の一部を東・西・北で確認した。この東西間が約21mであることから、基



第100次調査　西側トレンチ南壁（西半）土層図　1/40

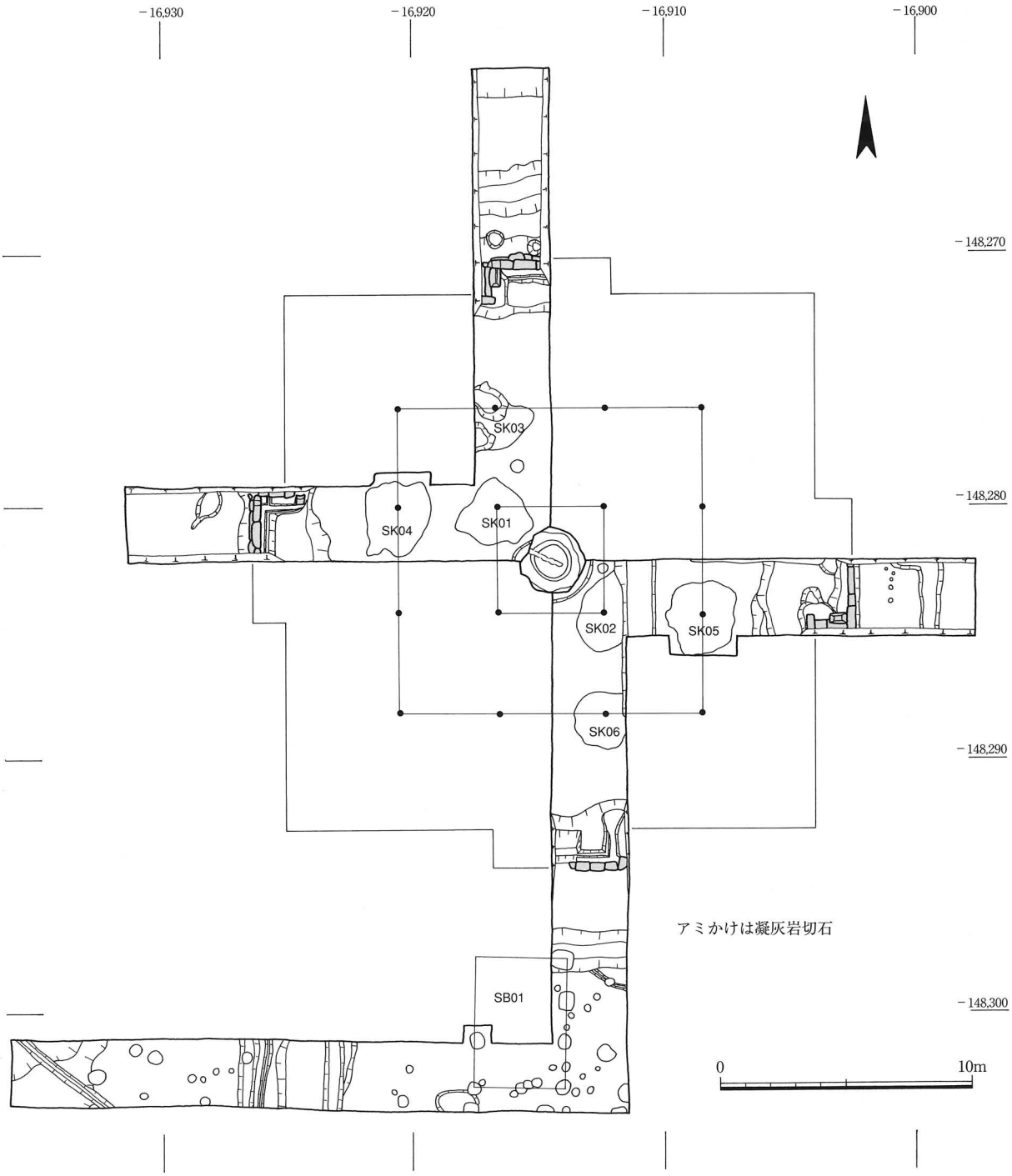
壇の平面規模は約21m（70尺）の正方形になることがほぼ確定できた。高さについては上面が削られているため定かではないが、延石の上面の標高が59.8m前後であり心礎上面と約2mの比高差がある。心礎が露出する部分を考慮すると、基壇の高さは約1.8m（6尺）であったと推定される。

基壇は、暗紫色土と黄色土が3cm程度ずつ交互に突き固められた版築によって築成されていることが部分的に確認できる。階段部分も本体と同時に築成されている。なお東側トレンチの北壁沿いにのみ、本来の築成土とは土質の異なる部分が階段から心礎近くまで認められる。今回わずかに検出しただけで範囲は未確認であるが、心礎を引き上げるための斜路を埋めた跡である可能性も考えられる。

以上の結果、基壇本体の端部は現土壇端よりそれぞれ6～7m内側におさまり、西塔基壇は現土壇より一回り小さいものということがわかった。これは東塔跡として残る土壇とほぼ同じ大きさとなるものである。

塔

基壇上面において土坑を6つ検出した（SK01～06）。これらは礎石を抜き取った痕跡と考えられ、平面形は一定しないが、おおよそ直径2m程度の円形状で、深さも



第100次調査　遺構平面図　1/250

北階段（東から）

礎石抜取痕跡（西から）左手前が心礎

0.4～0.6mとばらつきがある。埋土中および底面には根石に用いられた人頭大の河原石が残存するが、礎石を抜き取った際に掘り起こされた根石が他の穴に放り込まれてもいるようで、根石は土坑によって多寡がある。元位置として認識できる根石は、築成土に直接埋まり込んだ状態で、掘形は認められない。したがって根石の据付けは基壇を版築していく工程と並行して行われたものと考えられる。

これら抜き取り痕跡のうちＳＫ01・02は四天柱のもので、柱間の推定値は約4.2m（14尺）である。ＳＫ03～06は側柱のもので、四天柱と側柱の柱間は約3.9m（13尺）となり、側柱列の一辺は13－14－13尺で中の間が１尺広い。したがって塔の初重の平面規模は、一辺約12m（40尺）の方三間となる可能性が高い。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡ＳＢ01は、桁行き1.5m（５尺）－1.5m（５尺）－1.8m（６尺）、梁間1.8m（６尺）等間の３×２間の南北棟である。基壇外周の瓦堆積層が堆積する以前の建物であり、位置的に西塔建立以前のものと考えられる。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物には瓦類、土器類、金銅・銅製品、鉄製品、銅銭がある。大半は瓦類で、整理箱860箱におよぶ。

軒丸瓦は6138Ｃｂと7251Ａ、軒平瓦は6712Ａと6712Ｂのそれぞれ２つの型式が大半を占める。

金銅・銅製品は、破片が多く不明なものが多いが、ほぼ完形品として風鐸がある（１・２）。身の高さ30.3cm、最大径15.5cm、風招が幅34cm（推定復原）、高さ19.0cmで、鉄製の舌をもち、表面は鍍金されている。この他水煙の一部と考えられる厚さ２cmの鍍金された銅板（３）や長さ１mを超える銅板など、厚手（厚さ1.5cm前後）の破片18点と薄手（0.5cm前後）の破片20点余りが黄色粘質土層から多量の瓦とともに出土している。

鉄製品は釘以外詳細不明なものであり、銭は和同開珎１点が築成土上面から出土した。

土器類はほとんどが後世の開削土から出土した中・近世の瓦器、瓦質土器、陶磁器で、明黄灰色砂質土からは10世紀後半の土師器が少量出土している。

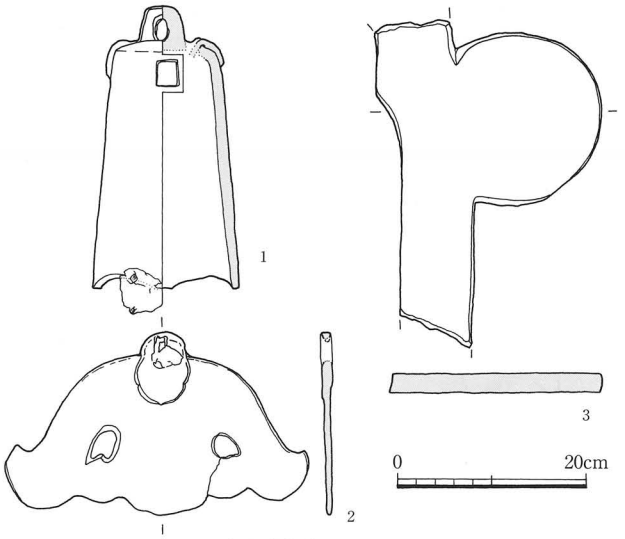
Ⅴ　まとめ

今回の調査は整備計画を進めるうえでの最小限の調査区を設定したにすぎないが、多くの重要な成果を得ることができた。

基壇外周には瓦を大量に含む層を２枚確認した。含まれる瓦は同種のものが多いが、土層の状態はまったく異なり、二度の瓦の崩落があった可能性が高いと考えられる。ただし、この点については今後調査を進めていくうえで再検討が必要であろう。

出土瓦からは西塔の創建時期が８世紀末～９世紀初頭であることが推定され、西塔は東塔（８世紀中頃）に約半世紀遅れて建立されたものということになる。

なお、階段部分以外の基壇化粧の状態や掘り込み地業及び版築の状態、地鎮の有無など今後の調査によって明らかにすべき点も多く残っている。　（松浦五輪美）

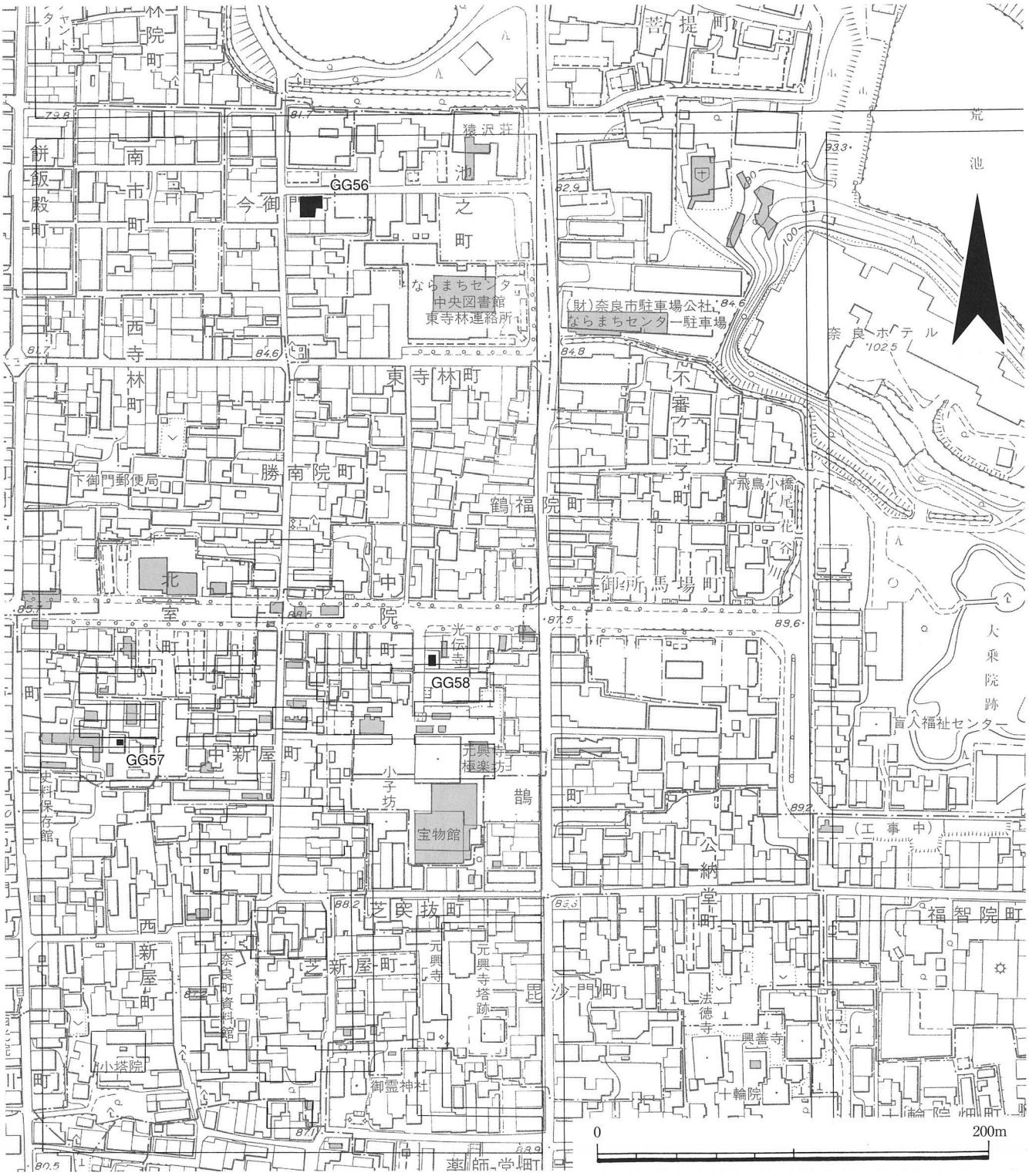


出土金銅製品　1/8

16. 元興寺旧境内の調査　第56～58次

平成14年度は３件の発掘調査を実施している。検出した遺構の多くは、中世・近世が主体を占めているが、第57次調査では、奈良時代の太房基壇を検出することができた。

調査次数	届出者名	工事内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
56	ロイヤルエース株式会社	共同住宅建設	今御門町 10-2 他	H 14.5.22 ～ 5.31	77 ㎡	武田
57	個人	個人住宅新築	脇戸町 7-2	H 14.6.27 ～ 7.8	9 ㎡	三好
58	個人	個人住宅新築	中院町 9-1	H 15.1.7 ～ 1.14	22 ㎡	山前



元興寺旧境内発掘調査位置図　1/3,000

元興寺旧境内　第56次調査

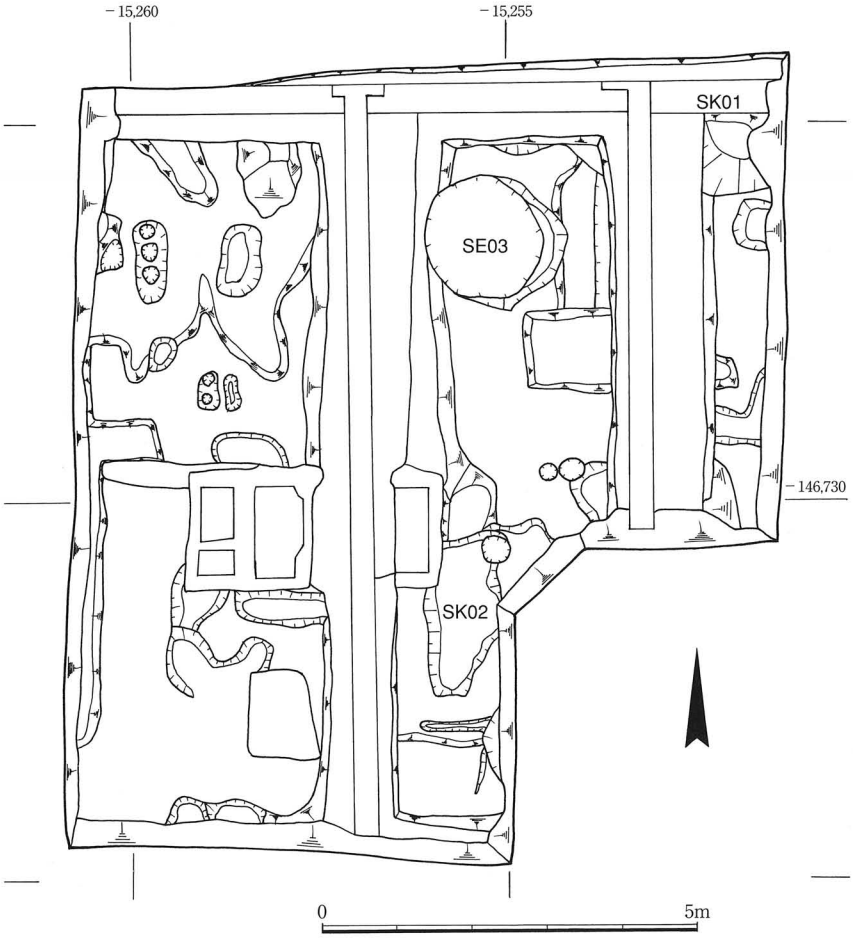
調査地は、元興寺旧境内の伽藍復原では主要伽藍地区北方の寺地の北辺に近い場所に該当している。

過去に調査地の南東約80mで実施した調査市ＧＧ第６次調査（昭和61年度）では、奈良時代から鎌倉時代にかけての土坑、溝、井戸等を検出している。今回は、既存建物の基礎工事による破壊を免れているとみられていた調査地の西側部分に、東西約９m、南北約10mの規模で発掘区を設定したが、調査の結果この部分にも地中梁が縦横に施工されていることが判明した。ただし、その隙間において遺構をいくつか検出することができた。検出した遺構は鎌倉・室町時代の井戸と土坑である。

発掘区内の基本層序は、上から、造成土（0.3～0.5m）、暗灰色粘質土もしくは灰褐色粘質土（0.2～0.3m）の堆積があり、地表下約0.5～0.8m付近で黄灰色もしくは淡青灰色シルトの地山に至る。遺構面は地山上面で、発掘区内における地山上面の標高は、概ね82.6～82.7mである。検出した遺構は、12、13世紀の土坑、15世紀の井戸である。以下、その概略について述べる。

ＳＫ01は、発掘区の北東隅で検出した土坑である。北側と東側は地中梁の基礎工事で削平されている。発掘区内は東西約1.0m、南北約1.1m分を確認した。深さは確認できた分で約1.2mある。埋土から12世紀前半の瓦器椀や土師器皿が出土した。ＳＫ02は、発掘区中央やや南側で検出した土坑である。掘形は平面不整形を呈し、南西部分は発掘区外へと延びていく。発掘区内では東西約1.6m、南北約2.2m分を検出した。深さは約0.2mで、埋土から13世紀前半の瓦器椀、土師器皿が出土した。ＳＥ03は発掘区中央やや北寄りで検出した井戸である。掘形は平面楕円形を呈する。東西径は約1.8m、南北径は約1.6mを測り、検出面から深さ約2.2m付近まで掘削を行ったが、井戸底は確認できなかった。また、枠材についても確認できず、素掘りであったか抜き取られたかは不明。埋土からは奈良～平安時代の瓦に混じって、15世紀後半の土師器皿などの土器が出土した。

このほかいくつか土坑とみられる遺構を確認しているが、攪乱により削平されているものが多く、規模を明確に確認できるものは少ない。遺物は遺物整理箱約15箱分が出土した。（武田和哉）



第56次調査　遺構平面図　1/100

第56次調査　発掘区全景（南東から）

井戸SE03（西から）

元興寺旧境内・脇戸古墳の調査　第57次

本調査地は、元興寺の伽藍復元図によると、元興寺の北西部にある南西行大房が想定されているところである。西僧房推定地内ではこれまでに５回にわたって発掘調査が実施されており、すぐ西側で行われた調査（市GG第51次調査）では、奈良時代の南西行大房の基壇を検出している。また、市GG第39次・第51次・第53次調査では、脇戸古墳（５世紀）の周濠を検出している。脇戸古墳は、一連の調査成果から推定すると、少なくとも30m以上はある円墳の可能性が考えられ、奈良時代以前の歴史を考える上でも重要な発見である。今回の調査は、脇戸古墳のほぼ中心部及び奈良時代の大房の基壇が想定される箇所に発掘区（発掘面積：９㎡）を設け実施した。

発掘区内の基本的な層序は、造成土（0.3m）の下に、明褐色土、暗褐色土、基壇築成土と続き、地表下約1.1mで暗黄褐色粘土の地山に至る。発掘区の南半部では、基壇築成土と地山との間に、平瓦片を包含する暗黄褐色粘砂または橙褐色粘砂（0.2m）が堆積している。標高は、基壇上面が約88.2m、地山上面は87.7～87.85mである。遺構は、明褐色土・基壇築成土・暗黄褐色粘砂のそれぞれの上面で検出した。発掘区の80%近くを占める範囲に現代の撹乱が及んでおり、地表から約1.5mの深さまで削平されている箇所があるが、奈良時代及び鎌倉時代の遺構等を検出することができた。

奈良時代の遺構　僧房の基壇、柱穴を検出した。

基壇　基壇は、検出面（標高約88.2m）から深さ0.3～0.4mまでが基壇築成土である。基壇の基礎となるのは、基本的には暗黄褐色粘土の地山であるが、低い部分では暗黄褐色粘土または橙褐色粘砂を基礎にしている。各々の築成土は、褐色系または灰色系の粘土・砂・含礫土を２～８cmの厚さで突き固められており、11層分を確認した。築成土には、円筒埴輪の破片が数点包含していた。今回の調査で検出した基壇は、位置関係からみて、市GG第51次調査で検出した西南行大房の基壇と同一のものであることが分かり、さらに発掘区外東へ続いていくことが明らかになった。

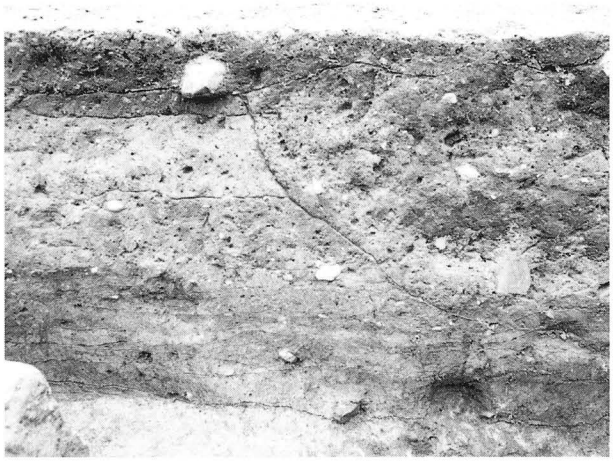
柱穴　基壇築成土と地山の間には、部分的に暗黄褐色粘砂または橙褐色粘砂が堆積している箇所が見られるが、この層の上面で柱穴１・２を検出した。柱穴１は、東西0.4m、南北0.3m、検出面からの深さは0.1mである。この北側で検出した柱穴２は、径0.2m、深さは5cmと浅い。これらが建物等の柱穴になるかどうかは不明だが、層位的な関係や西隣での調査（市GG第51次調査）でも基壇築成土よりも古い時期の建物を検出していることから考えて、大房の前身遺構であることは明白である。

詳細な時期については不明だが、ベースとなる暗黄褐色粘砂から平瓦が出土していることも考慮すると、奈良時代になってから前身遺構が掘られ、これよりも遅れて大房の建設が行われたことが推察できる。

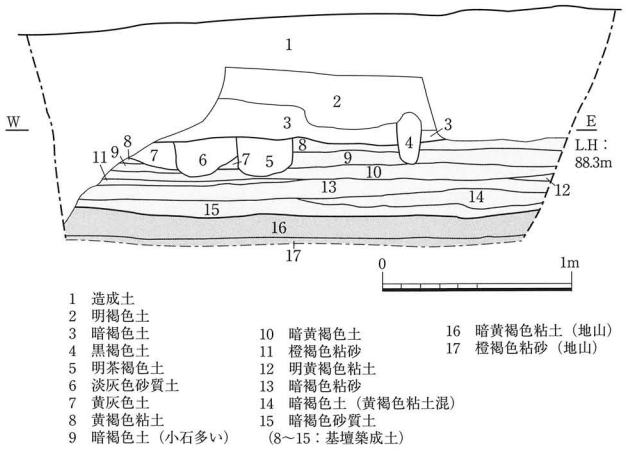
この他に、柱穴とともに平面方形の遺構SX01を検出した。東西1.0m、南北1.3m以上、検出面からの深さ約0.1mを測る。出土遺物もなく、性格は不明である。

鎌倉時代以降の遺構　残存する基壇の上面（標高約88.2m）で、柱穴３～６・土坑SK01・溝状遺構SX02を、暗褐色土））上面で柱穴７を検出した。

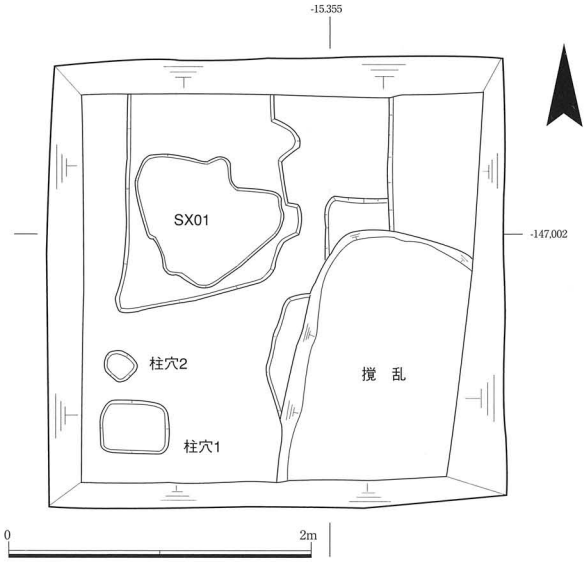
柱穴　いずれも一辺0.2m程度の小さいものばかりである。柱穴４には、径８cmの柱痕跡が残っていた。各柱穴から土器の小片が出土しているものの詳細な時期は不明。柱穴7は、柱穴３～６及びSK01、SX02よりも１層上で検出したもので、一辺0.25mの方形掘形である。検出面からの深さは５cm程度しかなかった。出土遺物は



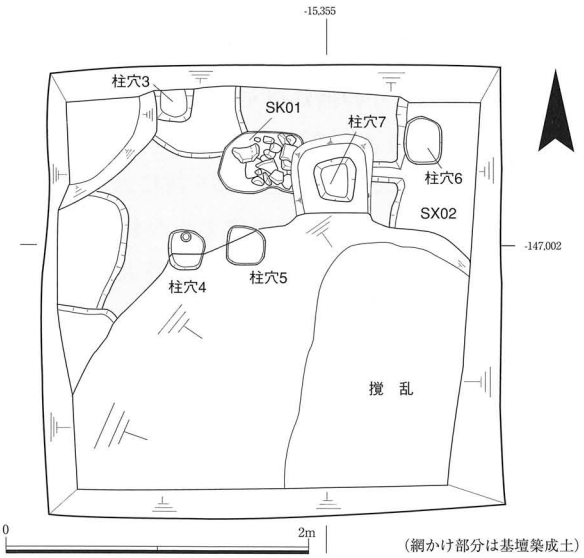
発掘区東壁土層推積状態（西から）



第57次調査　発掘区北壁土層図　1/40

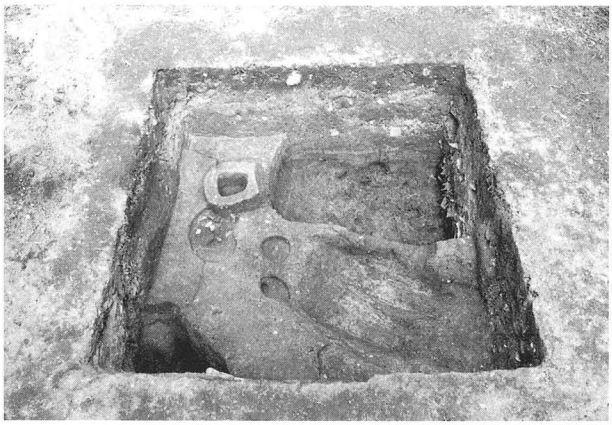


第57次調査　遺構平面図・暗黄褐色粘砂上面　1/50



第57次調査　遺構平面図・基壇築成土上面　1/50

暗黄褐色粘砂上面柱穴・SX01（北から）



基壇築成土上面柱穴・SK01・SX02（西から）

柱穴１・２（南から）

SK01（北から）

なく、詳細な時期は不明。

土坑　SK01は、東西0.9m、南北0.3mの平面楕円形の掘形を呈し、検出面からの深さは0.3m。底部に１～８cm大の礫と20cm位の大きさに割られた平瓦とで敷き詰めていた。埋土から13世紀代の土師器・瓦器が出土。

まとめ　今回の調査成果は以下のとおりである。

①　奈良時代の大房の基壇築成土が良好な状態で残存していた。大房に関わる建物の柱穴は検出できなかったが、場所によっては基壇の北・南端が残存している可能性が推察できる。

②　本調査地内においても、時期は特定できないが、大房が建設される前に何らかの施設があったことが明らかになった。

③　今回の発掘区は、脇戸古墳のほぼ中心部（推定）に設定したが、古墳の主体部らしき遺構は検出することができなかった。基壇築成土中に埴輪の破片が包含されている状況からみて、奈良時代の元興寺を建立する際に、大規模な土地の改変、造成工事が行われたことが伺える。

今回の調査区は狭小ではあったが、元興寺の歴史を考えていく際の手がかりのひとつとなった。　（三好美穂）

元興寺旧境内（僧房推定地）・奈良町遺跡の調査　第58次

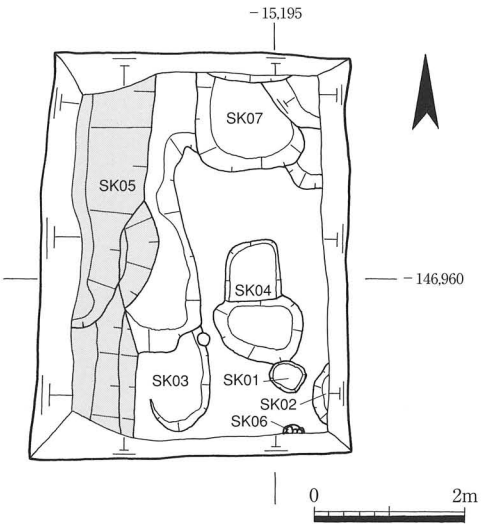
調査地は、元興寺旧境内の伽藍復元では、僧坊の東室北階小子房が想定される位置である。調査地の東約10mで実施した市ＧＧ第33次調査（平成３年度）では、12世紀末から14世紀中頃の土坑、17世紀の土坑、時期不明の柱穴を検出しているが、奈良時代の僧房に関する遺構は検出されていない。今回の調査では、奈良時代の僧房に関する遺構の確認および中近世の遺構の把握を主目的とした。

発掘区内の基本的な層序は、上から造成盛土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、明黄茶色粘土または暗褐色粘土と続き、現地表下約0.9mで黄褐色粘土の地山に至る。遺構面は地山上面で、標高は概ね76.7mである。

検出した遺構には、12世紀後半から16世紀の土坑がある。以下に概要を述べる。

ＳＫ01は発掘区南東で検出した土坑。東西0.5m、南北0.4m、深さ0.2mである。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、12世紀後半の土師器皿が出土した。重複関係から後述のＳＫ04よりも古い。ＳＫ02は発掘区南東で検出した土坑。発掘区外へと続くため規模は不明であるが、東西0.2m、南北0.9m、深さ0.2m分確認した。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、12世紀後半の土師器皿、瓦器椀・皿が出土した。ＳＫ03は発掘区の南西で検出した土坑。東西0.8m、南北1.2m、深さは0.1mである。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、14世紀の土師器皿が出土した。ＳＫ04はＳＫ01の北で検出した土坑。東西1.5m、南北1.6m、深さ0.05～0.15mである。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、14世紀の土師器皿、常滑窯の甕が出土した。ＳＸ05は発掘区の西で検出した溝状の遺構。発掘区外へと続くため全容は不明であるが、東西1.0m以上、南北4.5m以上で、深さ0.7～1.0m分を確認した。埋土は大きく４層に分かれるが、出土遺物の時期差がないのでほぼ同時期に埋没したものと思われる。埋土から奈良時代の須恵器鉢・甕、土師器皿、丸瓦、平瓦、面戸瓦、磚、13世紀の土師器皿、15世紀前半の土師器皿・羽釜・鍋、瓦質土器擂鉢・捏鉢・浅鉢・皿・風炉・羽釜・蓋、信楽窯壷か甕・擂鉢、常滑窯の壷か甕、瀬戸・美濃窯系の皿・盤、中世の平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦、龍泉窯系青磁椀、白磁椀、砥石、不明木製品が出土した。ＳＫ06はＳＫ01の南で検出した土坑。発掘区外へと続くため規模は不明であるが、東西0.3m、南北0.15m、深さ0.2m分を確認した。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、16世紀の土師器皿、時期不明の瓦質土器、常滑窯甕が出土した。ＳＫ07は発掘区北東で検出した土坑。発掘区外へと続くため規模は不明であるが、東西1.6m、南北1.5m、深さ0.2m分を確認した。埋土から奈良時代の丸瓦、平瓦、16世紀の土師器、中世の平瓦、時期不明の瓦質土器、信楽窯擂鉢が出土した。

今回の調査では、12世紀後半から16世紀にかけての遺構を検出したが、奈良時代の元興寺の僧坊にあたる遺構は確認できなかった。また、今回検出したＳＸ05については、埋土の堆積状況に水が流れた形跡を確認できないが、溝底が南から北にむかっての下り勾配であることから南北溝になると思われる。調査地の周辺においても15世紀代の南北方向の溝は検出されていない。今回は発掘区が狭かったこともあり、詳細については明らかにすることはできなかった。　（山前智敬）



第58次調査　遺構平面図　1/100

第58次調査　発掘区全景（北から）

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成14年度

平成18年3月28日　印刷
平成18年3月31日　発行

編集　文化財課　埋蔵文化財調査センター
（奈良市大安寺西二丁目281番地）

発行　奈良市教育委員会
（奈良市二条大路南1丁目1番1号）

印刷　株式会社　明新社
（奈良市南京終町３丁目464番地）